月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.36

啄木鳥しんき
イラストメッセージ

jdkバンド
ボーカル・コテカナの
コテ放題♥

ファルコムjdk バンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

ティオの
ファルコムラジオ
めんどくさいです…
でもがんばりますの
舞台裏

ファルコムニュース

ドラマCD『英雄伝説 零の軌跡』シリーズに
収録された短編ギャグシナリオを一挙掲載！

読み切り漫画
フリーダム遊撃士大集合!!
『3rdフリータイム！』
矢原そらこ

お待たせしました「ランディ編」
『零の軌跡
ショートストーリーズ』

アニメも絶好調放送中！
さらに今回は収録レポート漫画も掲載！
『みんな集まれ！
ファルコム学園』



速報!! 『閃の軌跡』続編のタイトルが決定!!

さらに期待の新作についての続編も!?



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

速報!!『閃の軌跡』続編のタイトルが判明！　その名も……

THE LEGEND OF HEROES

閃の軌跡 II

センノキセキ II

1月25日に新宿ロフトプラスワンで行われたイベント「Falcom Acoustic Live & Talk Show 〜近藤社長に聞く!「閃の軌跡」続編と謎の大型タイトル〜」にて、『閃の軌跡』の続編タイトルが発表された。また、新たな場面写真も入手したので、どんどん紹介していくぞ！



タイトル発表の瞬間！　まさかのイベントでの発表に、一同騒然

今月の新たな場面写真はこちら!!



新たな衣装を身にまとい、ヴィクターが艦長を務める高速巡洋艦・カレイジャスの方へ駆けていくアリサ。停泊している場所がどこかも気になるところだ



イベントで近藤社長が「モーションはすべて一新した」と言っていたとおり、ラウラの新Sクラフト（？）は横薙ぎで一閃するような構えに



リィンが導力バイクに!?　アンゼリカ先輩から譲り受けたバイクに乗って移動することができるようになるようだ



モーションを一新どころか、槍を二本使うようになったガイウス。長身で恵まれた体格を誇るガイウスだからこそという、強力そうなクラフトだ

■ 製本情報

タイトル	：	英雄伝説 閃の軌跡 II
発売日	：	2014年度予定
ジャンル	：	ストーリー RPG
対応機種	：	PlayStation®3 ／ PlayStation®Vita
価格	：	未定

さらに! 期待の新作の情報も思わずポロリ!? 新作の1本は、やはり『イース』シリーズだった!?

さらにイベントでは、「言ったらダメって言われていたのにイベントのタイトルに入ってて……」と困惑気味の近藤社長を、「言っちゃいましょう！」とオカジさんが後押し。その結果、思わぬ形で新作タイトルのひとつが“あの”ARPGシリーズだということが判明する思わぬ事態に……！



前号で掲載したイメージイラストにもいた怪鳥と思わしきモンスターや巨大な蛇のようなモンスターのイラストも公開された



近藤社長「新作タイトルのひとつはY（ワイ）ス…」と思わずポロリ。お酒の力って怖い……！



登場人物の設定資料も公開された。左下の行商人のイラストに「アルタゴ」の文字が書かれているのが発見されてしまい、奇しくも新作タイトルがバレちゃった！



さらには亜人型のモンスターも。文字が小さいが、「竜人」と書かれているのがわかる

2014台北ゲームショウでは『閃の軌跡』の中国語版、韓国語版の発売も発表！

さらに、1月23日から27日まで台湾で行われた「2014台北ゲームショウ」では、『閃の軌跡』の中国語版、韓国語版が2014年夏に発売されることが発表された。同じく、「Falcom jdk BAND」によるアジアツアーの開催も計画中とのことだ。





雄大な塔が描かれている美術設定。やはり「塔」はあのシリーズには欠かせない!?

©2014 Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

「理」の力で絶好調(!?) 放映中!!

第1回の放送から話題を攫った『みんな集まれ！ファルコム学園』。毎週およそ3分の中にこれでもか詰め込まれたファルコム作品のキャラクター達の学園生活は、ついにニコニコ動画でも配信開始だ。様々な広がりを見せる極上のギャグアニメ『ファルコム学園』の新規場面カット&キャストコメントを今月もどどーんとお届け！

みんな集まれ！ファルコム学園



冒険者の頬もゆるみまくり!?



▼授業中にチョークを使ったSクラフトが発動！　魔物が投げるチョークを体験できるのはファルコム学園だけ!?







新キャラ続々登場!

●スタッフ
原案：日本ファルコム株式会社
原作：新久保だいすけ
製作：株式会社キャラアニ、株式会社ダックスプロダクション
脚本：山下憲一
監督：ぴっぷや
キャラデザ・作画監督：青葉みずき

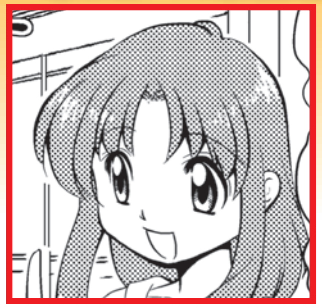
●キャスト
ダルク・ファクト興津和幸　ラッピィ…進藤尚美
アドル・クリスティン…梶裕貴　ティオ…水橋かおり
エステル・ブライト…神田朱未　ヨシュア・ブライト…斎賀みつき

新久保だいすけ先生コメント

ついに始まりましたね！　放映前は「3分でどれだけ出来るの？」と不安でしたがふたを開けてみれば想像以上の疾走感！　自分で考えた話なのに不覚にも笑ってしまいました特に3話ロイドの「警察だ☆」や4話アドルの「半キャラずらし〜」が大好きです！　これからどんどんひど…いえ楽しいことになっていきますのでご期待ください!!

公式サイト ▶ http://www.fal-gaku.com/

今月の最新キャストコメントはこのお二人！



リリア役 ▶ 喜多村英梨さん

■収録を終えた感想をお願いします。

喜多村：『イース』は私が2歳の頃の作品で年齢的に触れられないところもあったので、そういった作品でリリアという役をいただいた時は緊張と感謝を持って演じさせていただきました。2009年のドラマCDでは自分の思うリリアを音声で伝えていたのですが、今回は表情などを見られる、奥行きのある芝居ができるということが楽しかったです。豪華メンバーなので、どういう仕上がりになるのかもとても楽しみです。

■アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。

喜多村：とにかくキャストも豪華ですし、作品のファンの方も、こういった形で世界観を楽しんでいただけるっていうのは一ファンとしてもかなり貴重な作品に仕上がると思いますので、皆さん是非期待していてください。個人的にダルクの処遇が好きです（笑）。男女それぞれの目線で愛着がわくキャラクターがいると思いますし、可愛い女の子もたくさん出てきますので推しの生徒を見つけてあげてください！

ロイド・バニングス役 ▶ 柿原徹也さん



■収録を終えた感想をお願いします。

柿原：1話3分という尺の中で登場人物がたくさん出てくるので、キャラクター同士の絡みだったりとか、非常にテンポ感のある勢いだったりとか、掛け合いのオンパレードだったりとか、とてもエキサイティングな収録でした（笑）。

■アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。

柿原：ファルコム作品に僕は零、碧の軌跡と出演させて頂いておりまして、たくさんの方に作品が応援してもらっているんだなという思いがあります。その結果、アニメという形でたくさんの方に見てもらえるというのは光栄なことです。ゲームをプレイしていない方でもこのアニメを通して原作のゲームを遊んでもらえればと思いますし、今までずっとファルコム作品をプレイして下さっている方はもちろん楽しめる作品になっております。3分という本当に短い時間なので1話見逃すのはもったいないです！ぜひ全部見てもらえればありがたいなと思います。

放映スケジュール

TVで見逃したうっかりな人もこれで大丈夫です！

○TOKYOMX・サンテレビ
毎週日曜日22:27 〜 22:30

○ニコニコ動画
毎週日曜日20:30 〜
（第1話、最新話を無料配信中！）
配信サイト→http://ch.nicovideo.jp/falgaku

○AT-X
毎週日曜日20:25 〜 20:28
リピート放送　毎週（火）11:25 〜 11:28
毎週（金）5:25 〜 5:28
毎週（土）15:25 〜 15:28




皆さんこんにちは！ソーサリアンのウィザード(女)です
今日はアニメ「みんな集まれ！ファルコム学園」の収録レポートをお届けします!!
スタジオ
アニメになったので
アフレコ見学に来たら
レポマンを描くことになったよ！
新久保だいすけ
わーすでにスタッフの方々がスタンバイしてますね
あの隅っこでゴミのように転がっているのは原作の新久保だいすけですね
どーですか自分の作品がアニメになった感想は？
フフフ…俺の漫画がアニメになるワケがないこれは壮大なドッキリなのさ…
うわー初登場時のファン・フレディ王子みたいになってますね
僕のイメージを毛ほどでも傷つけてみろ…
ありとあらゆる手を使ってあんたを八つ裂きにしてやる！
あっヨシュアさん！
ヒィィ
チャッ


さらに豪華声優の皆さんが次々と！
そんな皆さんに土下座しまくる原作者!!
すいません！あんなヒドイ漫画描いててすいません!!
いやードラマCDで同じようなノリだし気にしないで下さいよ
ふふふ…これも全てアガットさんをラッセル家にお迎えする布石なんですっ
肉食
あの…僕のセリフ「美少女」ばっかりなんですけど
そーゆーキャラなんで
おはようございます先日キャストが決まったばかりのダルク・ファクトですよろしくお願いしまーす
わーーーっ
むうっ!?
ゴゴゴ
何だろうこの声聞いていると何だか魂が震えてきて…
服！脱がずにはいられないッ!!
ゴゴゴ
マスクオブアイズ
ボクは変態をやめるぞッダルク先生ィィィ!!
ドン
なぜそこで脱ぐだァァー！
許さんッ!!
キュゥゥゥゥーン





★つづきはファルコムラジオで!!



みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

マップと地下迷宮



迷わない少年



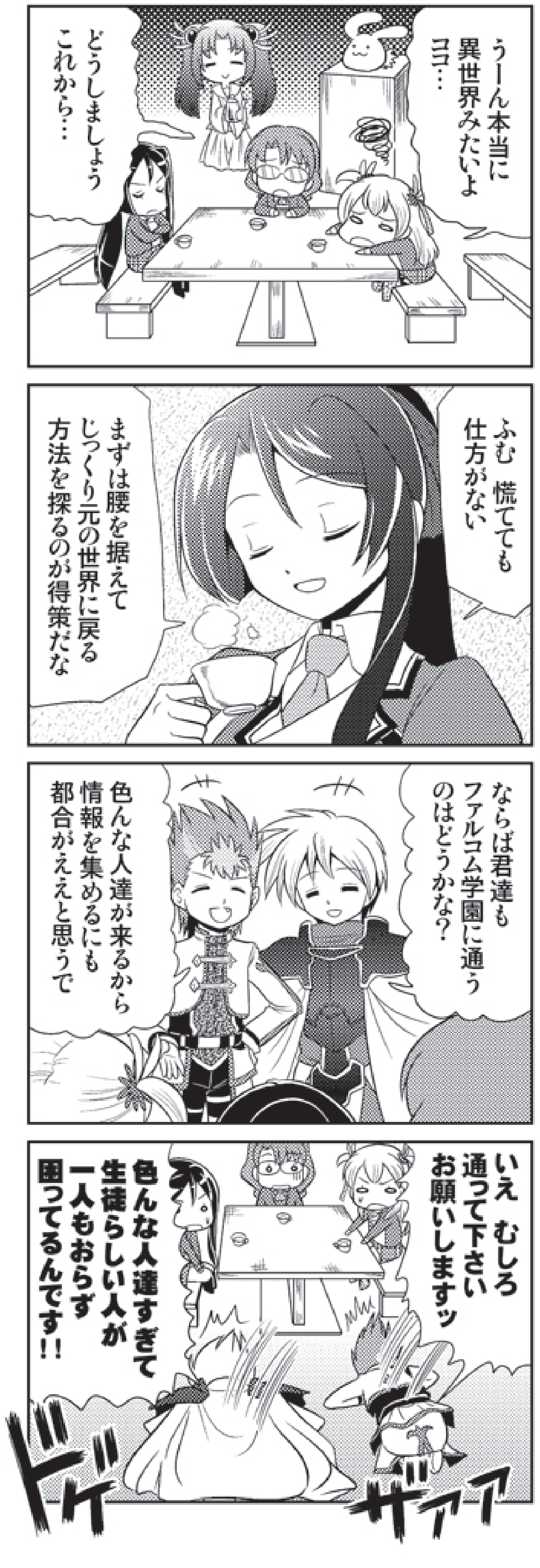
イリアさんのスキル



別世界の人々



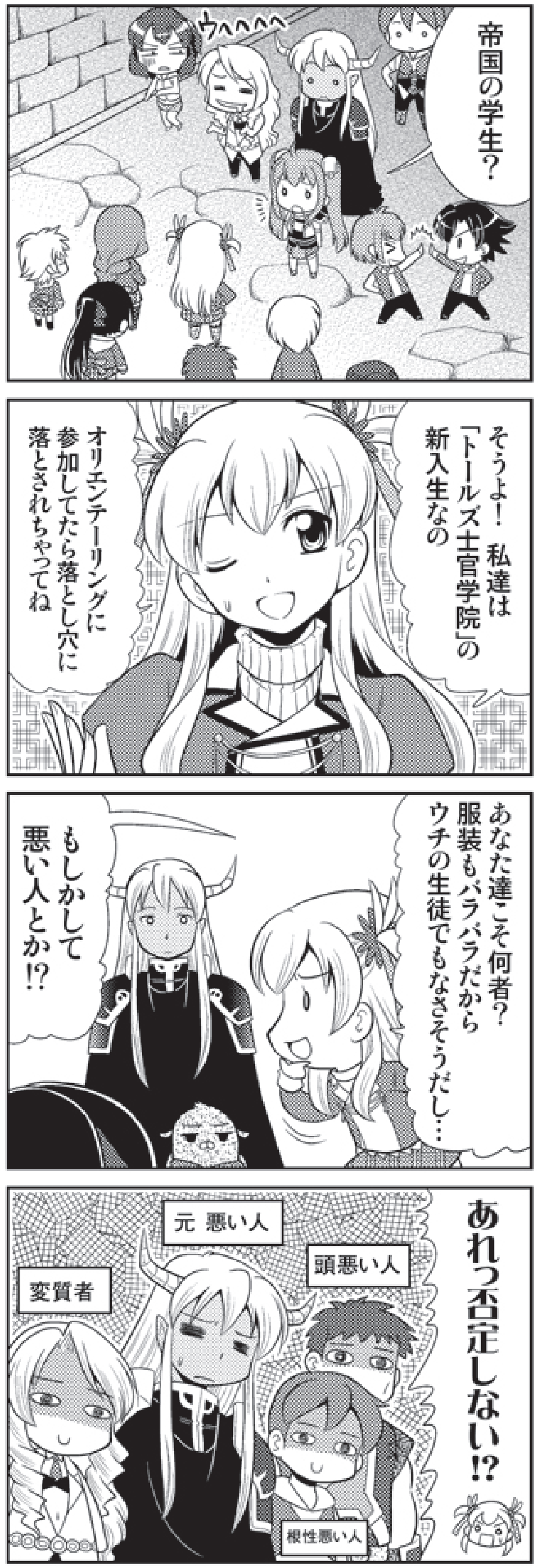
勧誘



そして人外へ



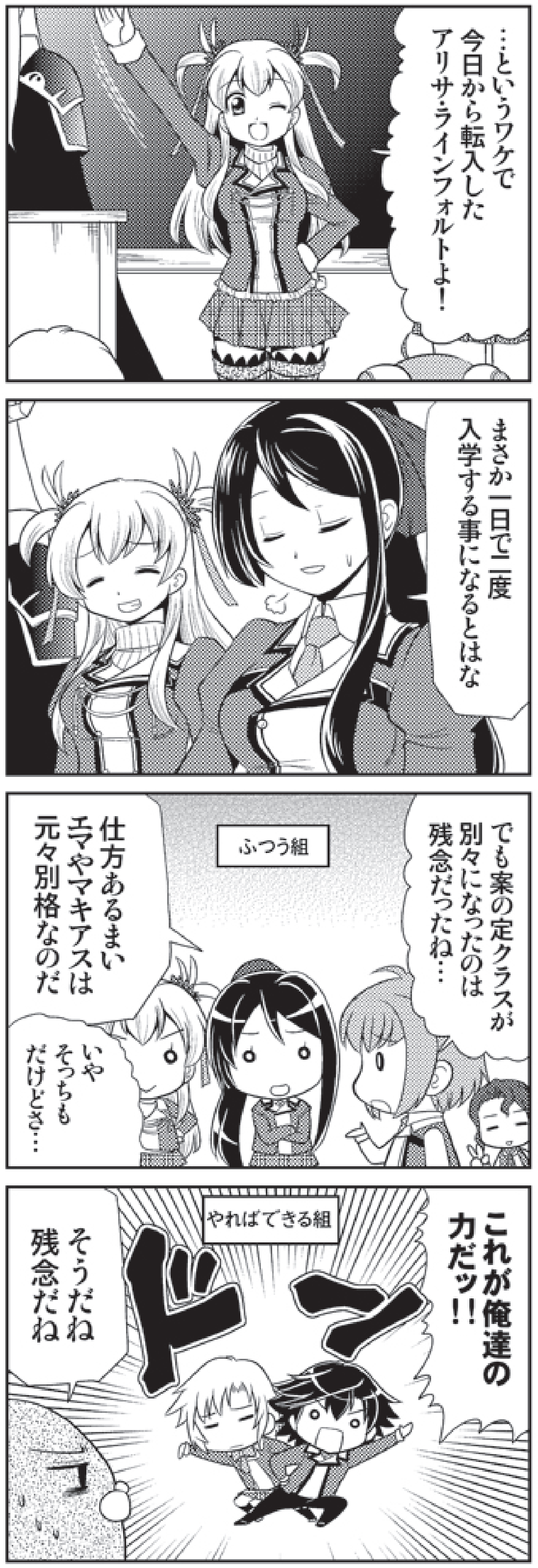
悪い人たち



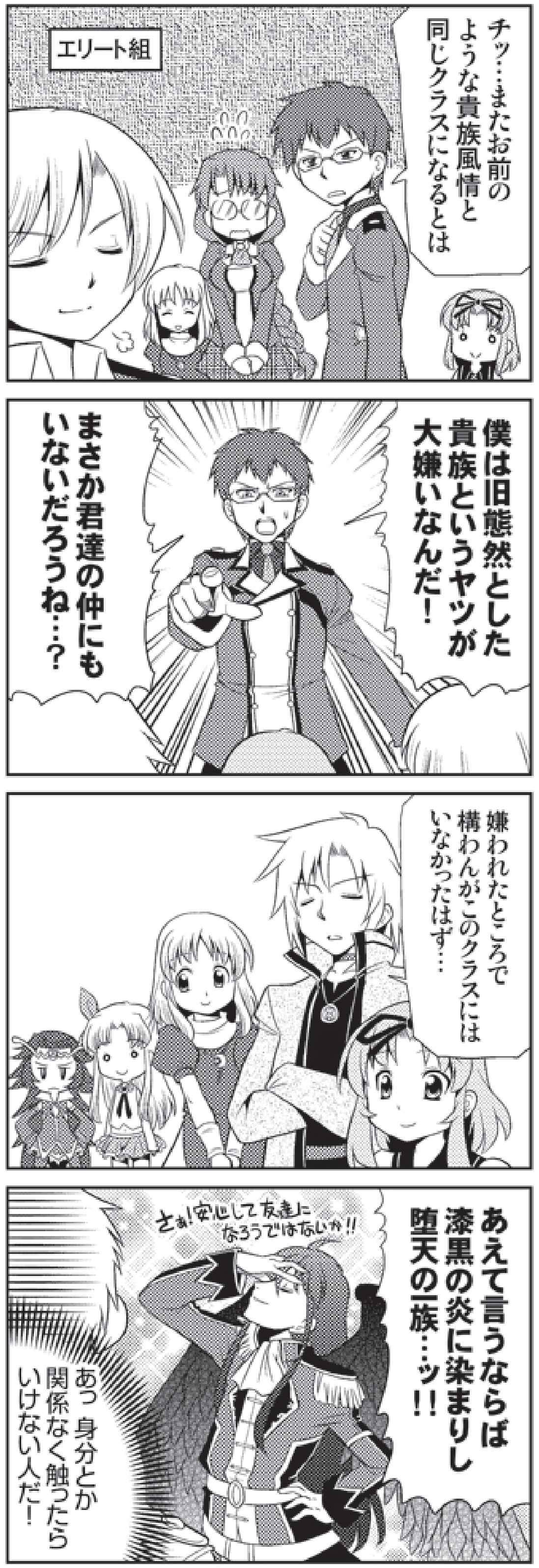
クラス分け



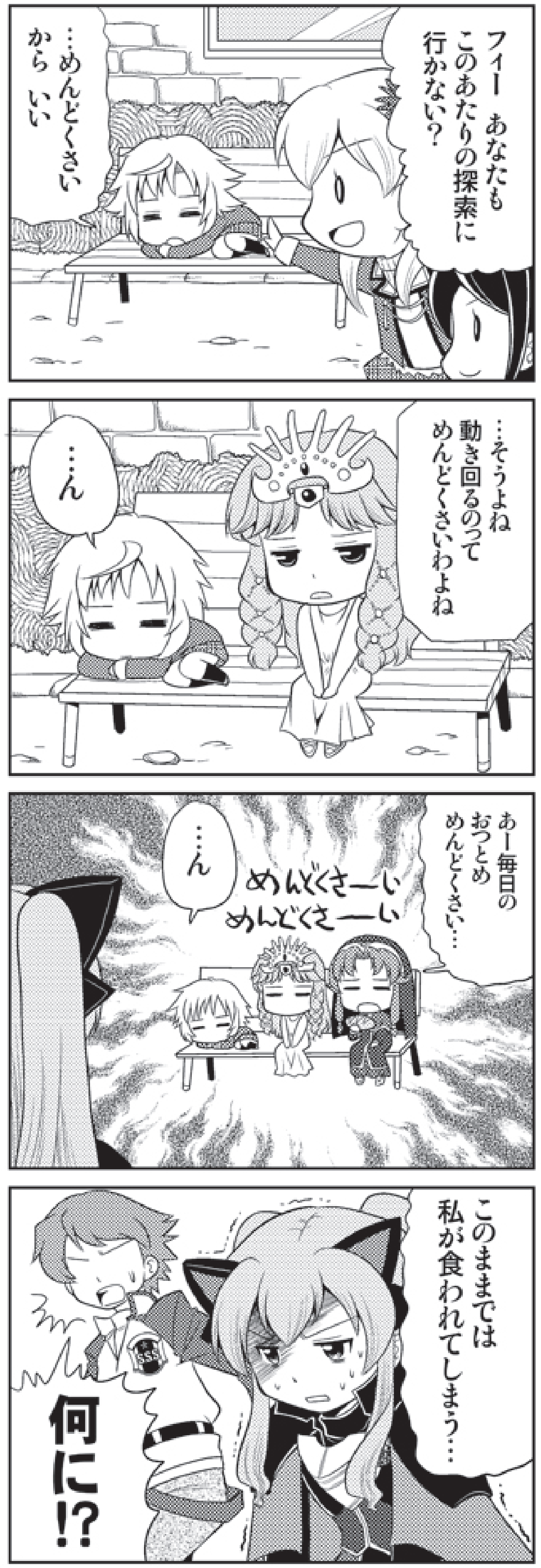
二度目の入学



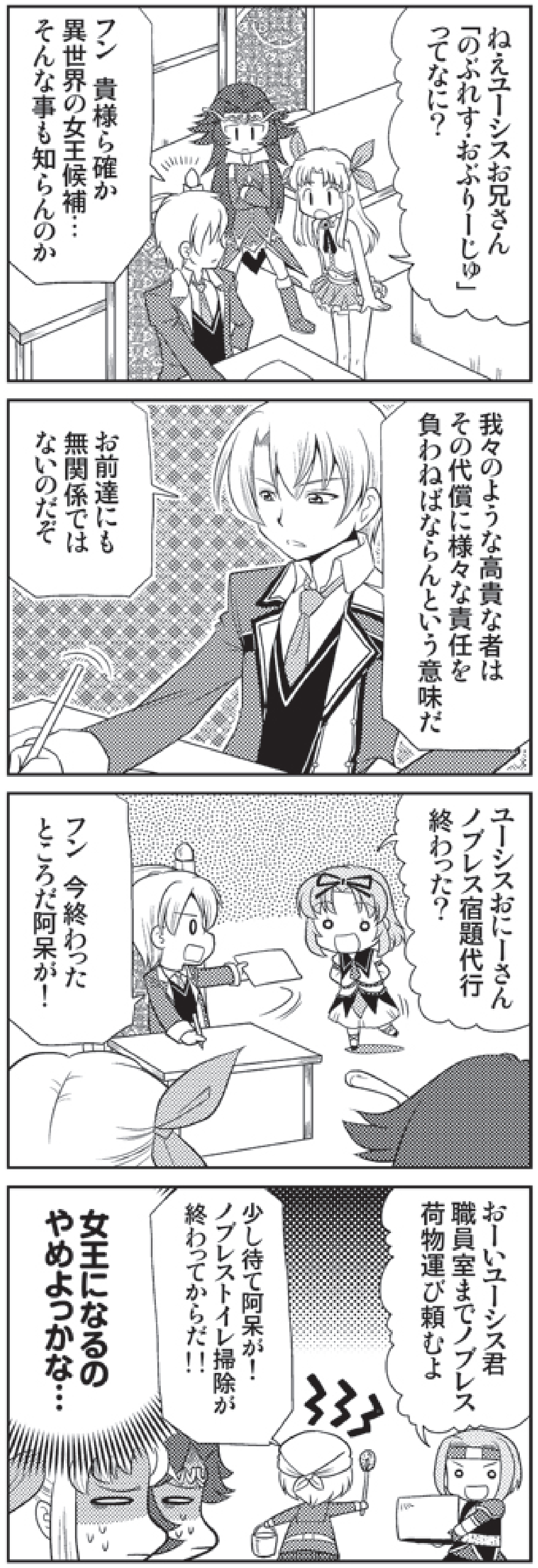
貴族



めんどくさい軍団



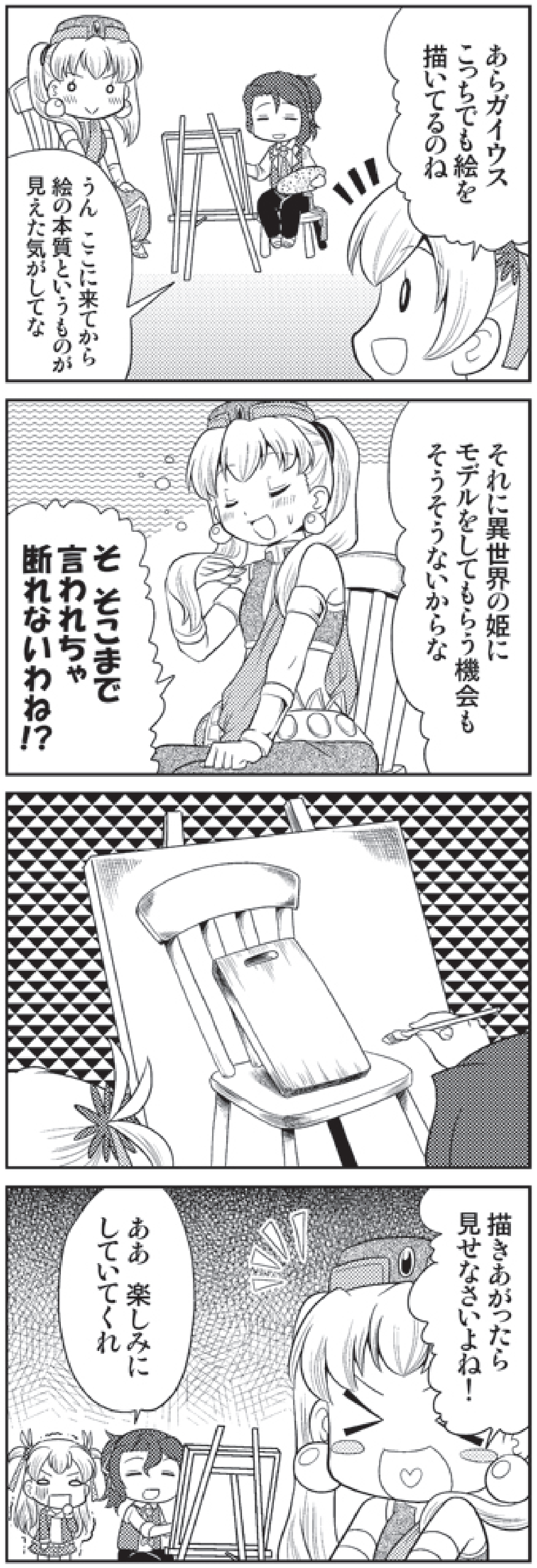
高貴なる者の責任



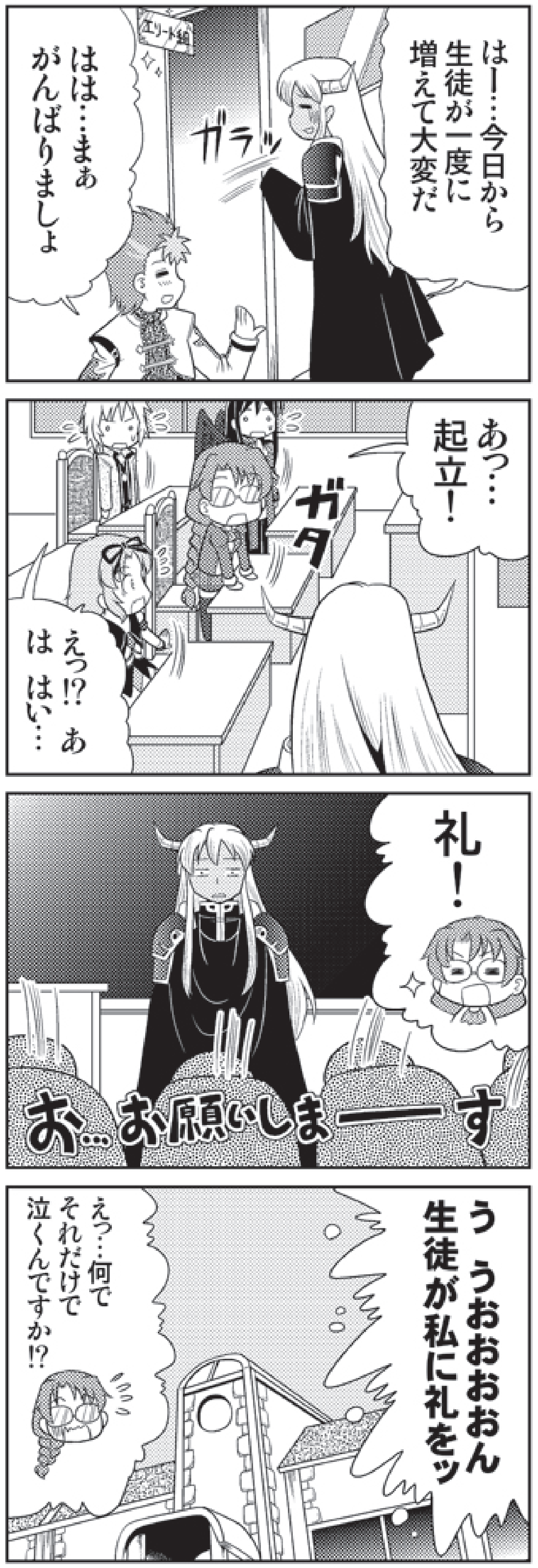
エマの歪み



モチーフの本質



ダルク先生の初体験



矢原そらこ **3rdフリータイム！**

★自由人遊撃士たちのシュールでキュートなギャグコミックが登場！



FB ファルコムBOOKS

目指せ！ファルコム一番星!!

日本ファルコムの人気キャラクター達が繰り広げるオールスターギャグ四コマの暴走は止まらない！ まさかのアニメ化でますますヒートアップ（？）するファルコム学園に君も入学してみないか!?







みんな集まれ！
ファルコム学園①②
著者：新久保だいすけ

価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-245-1

好評発売中!!

©Nihon Falcom Corp. All right reserved.

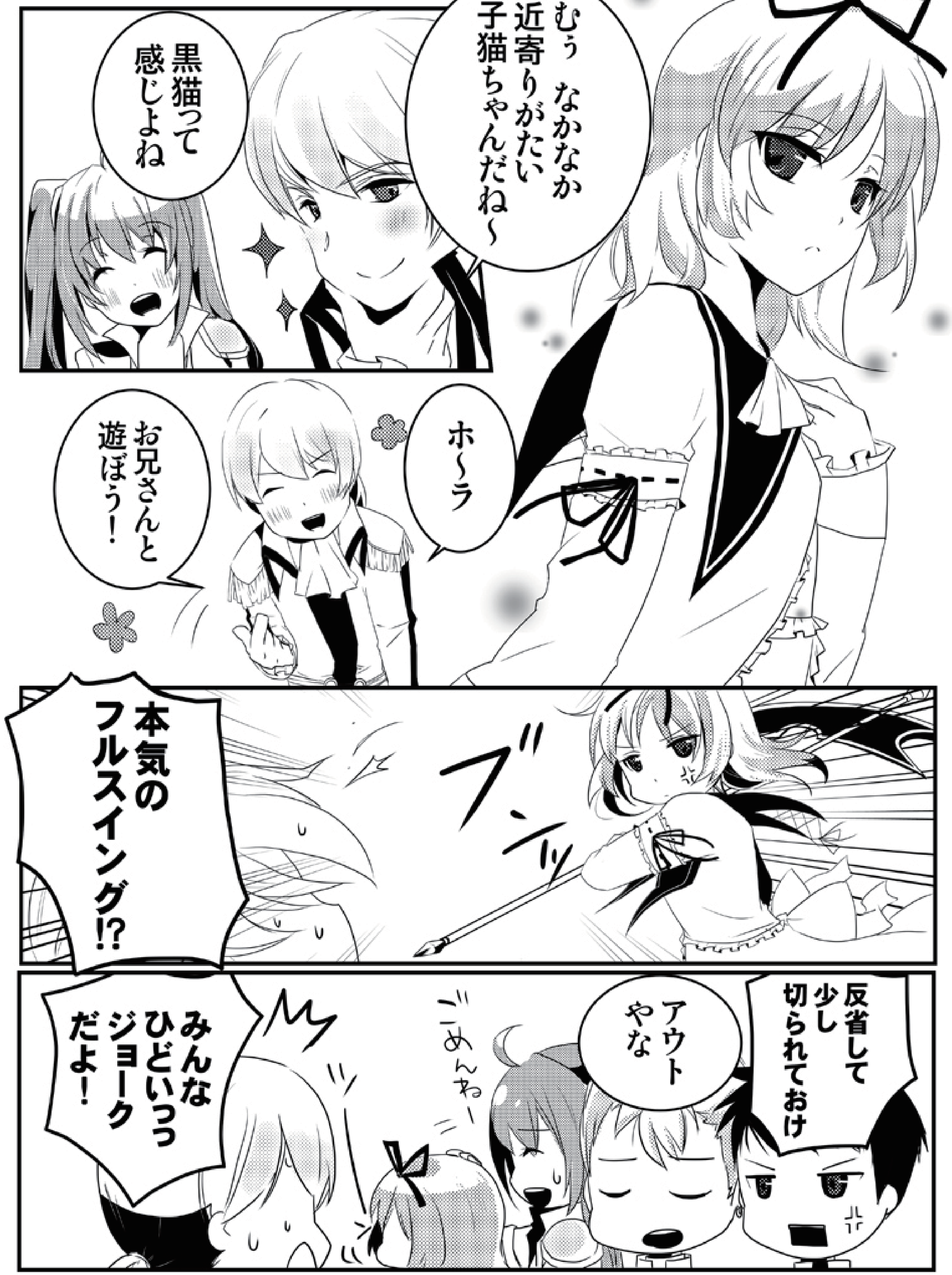
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

02:水風呂にどうぞ



03:取り扱い注意



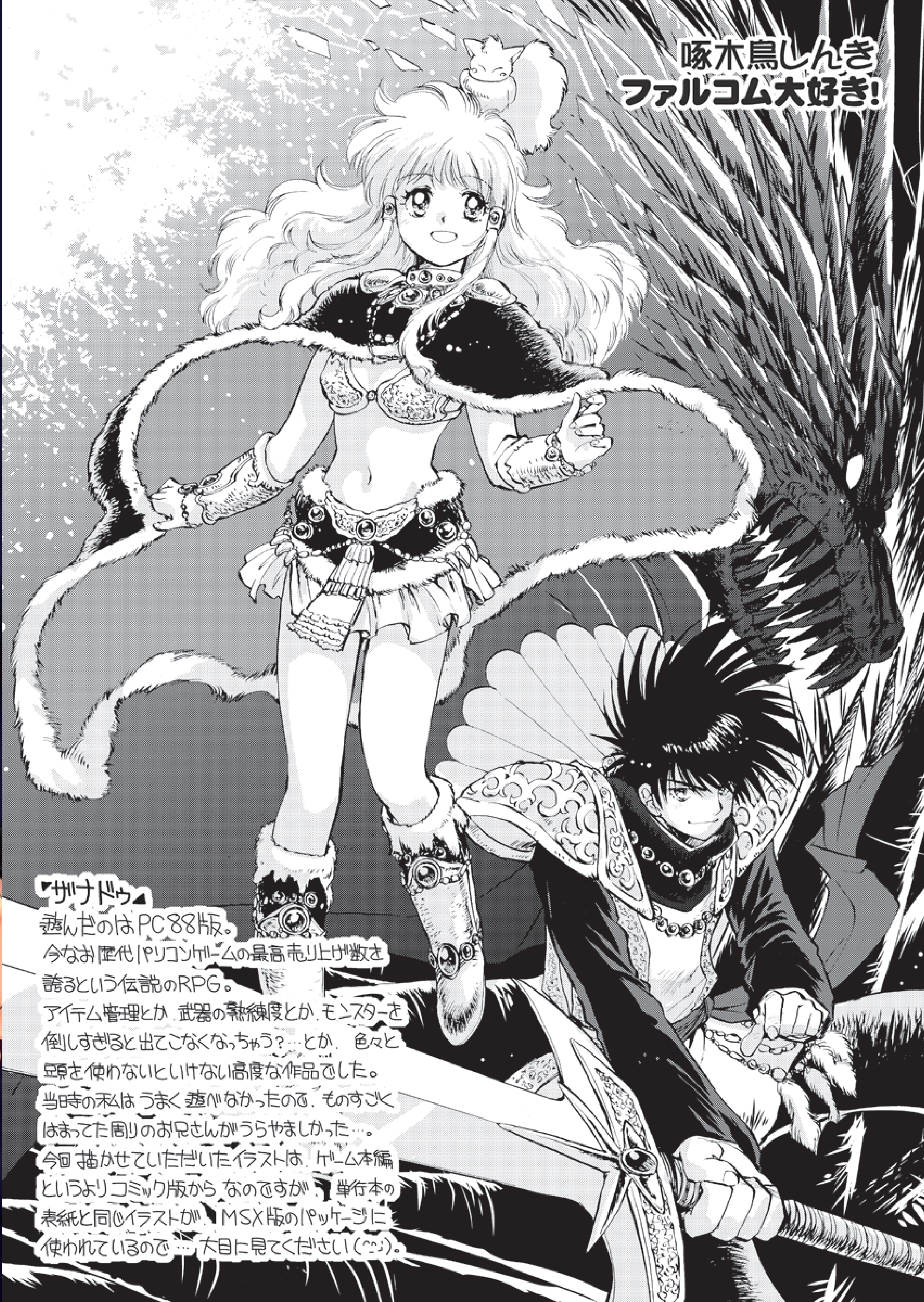

04:ご注文は
よし じゃあ ご飯の準備ー
え?
どうしたんですか 突然に
疲れて帰ってくるだろうし 作っておいてあげたら 喜ぶんじゃない?
材料は たくさん あるし
捜索隊☆
なるほど! お・も・て・な・し
ジャアーーーー
トトトトトト
ファッサァァァ
わーい おつまみ おつまみ~♪
おい
居酒屋か!!
私欲!?
おいしいです!
腹ペコシスター いつの間に!?


05:着替え
あれ? みんな 何してるの?
見て見てーー!
可愛い~!
いやぁ~ ヒマでついつい
ヒマって
ヒマすぎて 僕までこの 有様さ
うわー
ハッハッハッ 見とれないで くれたまえ
ないわー
じゃ 次やって みよっか♪
嫌です
バカしか いないの…?
くッ… くやしいが 君には 負けて しまうっ
大丈夫よ~ 似合うって
違う
公式 出るで
ガチ すぎて


06:激おこ
ちょっと回復しとこか
はーい
賛成です
でかいなー
ってまた出た!
戦うわよ!
みなさん行きますよ!
逆に行けんのか聞きたいわ
バシッ
ガッ
待って下さい 大皿料理は戦闘中は食べられません
ちょっと置いといたら?
冷めちゃい
真面目か
アホかぁああ 飯待ちしてくれるか!!
HP
EP
CP


07:女子
クローゼはおっとり系女子って感じよね
少しは見習いなよ ガサツ系女子!
あんですって
あ ティータは妹系女子ね
それもう妹でええやん
じゃあ私はー?
ガッツリ底なしのんべぇ系女子!!
エステルー?
女子って歳かなぁ
Fin


FB ファルコム BOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画:楽時たらひ　脚本:田沢大典
『空の軌跡』が始まる――
もうひとつの
原作:日本ファルコム
(『英雄伝説 空の軌跡』)
価格:893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


啄木鳥しんき
ファルコム大好き!
『ザナドゥ』
遊んだのはPC88版。
今なお歴代パソコンゲームの最高売り上げ数を誇るという伝説のRPG。
アイテム管理とか、武器の熟練度とか、モンスターを倒しすぎると出てこなくなっちゃう？…とか、色々と頭を使わないといけない高度な作品でした。
当時の私はうまく遊べなかったので、ものすごくはまってた周りのお兄さんがうらやましかった…。
今回描かせていただいたイラストは、ゲーム本編というよりコミック版からなのですが、単行本の表紙と同じイラストが、MSX版のパッケージに使われているので…大目に見てください(^^;)。

小説版 零の軌跡 ショートストーリーズ

田沢 大典

ランディの章 前編

ドレイクは部屋に入り、灯りをつける。

カジノハウスのオーナーの部屋、という言葉からは想像もつかない、質素な部屋がそこにはあった。古ぼけた大きめの机と椅子。年季の入ったソファーセット。部屋の主と同じく、派手さよりも質実剛健といった感じだ。

いつものように椅子に座り、身体を預ける。重さに耐えかねて悲鳴をあげるように椅子が鳴く。そのままドレイクは何とはなしに、部屋の片隅にあるケースに目をやった。

その部屋の調度品と同じように、使い込まれたトランク。あちこちに傷がつき、手荒に扱われたであろうことがわかる。

いい加減邪魔だな、とドレイクはつぶやくが、当然答えるものはない。

そのまま天井を見やり、ケースの持ち主の男のことを思い浮かべる。最初に会ったのはいつだっただろうか。正確な日付は覚えていないが、その時のやりとりのことは、今でも覚えている。

その日のカジノには、荒れた客がやってきていた。最近幅を利かせているルバーチェ商会の構成員のひとりだ。まさに商会の権威を笠に着るような下っ端ぶりで、ドレイクなどは内心であきれを通り越していた。

だが、ディーラーのエリンデに絡み出したところで、さすがに黙って見過ごすことは出来なくなった。

「てンめぇイカサマこいてんじゃねェのか、あァン⁉」

ドン！ とポーカーテーブルを割らんばかりの勢いで叩くそのチンピラ。かなりの酒が入っていることもあり、相当気が大きくなっているようだ。カジノではこういう客がたまに来る。それをうまくあしらうのも、オーナーである自分の仕事なのだが、今回は少々気が重い。

あれは、ルバーチェ商会という名のマフィアの構成員だ。現会長マルコーニの代になり、帝国と接近し、密輸などで莫大な利益を上げている。この街に住み、この手の商売をしている人間なら誰でも知っていることだ。そして彼らと対立するようなことになれば、とても面倒なことになるということもまた、当然の事実として知られていた。

うまくやらなくては角が立つ。といって、あの様子では多少痛い目を見せないと納得はしないだろう。さてどうするか……と思案していると、いよいよエリンデに手を上げそうになった。最早一刻の猶予もない、とドレイクが動こうと思ったその時、どこからともなくふらりとひとりの青年が現れ、チンピラの横に立った。

「まーまー兄さん、そんぐらいで」

「ンだてめェ……⁉」

ドスを利かせようとしたチンピラは、自分の前に立った青年の身長に驚く。頭ひとつ以上は高いだろうか。

「ここはカジノだぜ？ アツくなるのはわかるけど、ほら、周りの客も驚いちまってるし」

そう言って青年はあたりを見渡す。その時にドレイクははっきりと顔を見た。見慣れない顔だ。仕事柄、店に来る客の顔を覚えることは業務の一環である。常連客に厚遇するために、また出入り禁止にした連中を排除するために。だが、青年は常連客でも出入り禁止の連中でもなかった。

流れ者か、観光客か。どちらにせよ、安っぽい正義感を振りかざして仲介でもしようとしているのだろう。余計なことを。ケガをさせるまえに止めないと……とドレイクが考えている間に、事態はより悪い方向へと進行していた。

「いきがってんじゃねぇぞコラァ！」

フロアにひときわドスの利いた声が響く。どうやら、仲裁に入られたことがチンピラの神経を逆撫でしてしまったようだ。ここまで来るともう手がつけられない。ドレイクは荒事に至る覚悟を決めた。

だが、こちらが先に手出しをしてしまっては、後々やっかいである。ルバーチェの連中にいらぬ貸しを作ることなどない。あの青年に対してなんらか手出しをした時点で割り込もう、そう決めた。そうなればこちらは『客を守るために仕方なくやった』となるし、向こうには『カタギに手を出した』というレッテルが貼れる。

犠牲となる青年には悪いが、そもそも割り込んできたのは向こうなのだから、それぐらいは人生勉強だ、とドレイクはドライに考えた。

はたして、青年に向かってチンピラが胸ぐらを掴もうとしたその時。ドレイクを含めた周りにいた者達は、信じられないものを見た。

青年はまるでダンスでも踊るかのようにチンピラの手を取り、そのままひねってチンピラを投げ飛ばした――いや、床に転がしたという方が正しいだろう。とにかく、チンピラは床の上で大の字になっていた。

「おおっと、大丈夫かい？」

特に慌てた様子もない青年の言葉に、取り巻いて見ていた客達の間からクスクスと笑いが起きる。それほど、青年の動きは見事で、まるで大道芸を見ているかのようだった。だが、その笑いが、チンピラの怒る心の火に油を注いでしまった。

「てンめぇ……ッ！」

チンピラは無様に立ち上がると、腰ポケットからバタフライナイフを取りだした。乾いた金属音で、あたりが凍り付く。

「ナメくさったまねしやがって、アァ!?」

先ほどまで笑っていた客も、この事態までは予想していなかったようで一様に息を呑んでいる。だが、青年ひとりだけが先ほどと変わらぬ様子でつぶやいた。

「あーあ、抜いちまいやんの」

このままでは確実に青年がケガをする。止めなくては。頭ではそう考えていたドレイクだが、不思議と慌ててはいなかった。彼の長年の勘が、皮膚感覚が、大丈夫だと告げていた。何故だかは分からないが、大丈夫だと。

「オラてめぇ！」

謎の雄叫びを上げて、チンピラがナイフで青年に斬りつけようとしたその時。彼の長身が深く沈み、そのまま前に出た。

「ガッ！」

勝負は一瞬でついていた。青年が放ったボディーブローは確実にチンピラのみぞおちをとらえ、そのままくの字になって意識を失う。毛足の長いカーペットの上に、音なくバタフライナイフが落ちた。

「っとぉ。やりすぎたか？」

何が起きたのかわからなかった人々は、青年のひと声で我に帰り、一様に緊張を解いた。ホッとした空気が広がる。騒ぎが収まったと分かると、人々は自分の遊戯を続けるべく、スロットやポーカー台に戻っていった。

だが、そんな中、ドレイクだけはひとり青年を油断なく見つめていた。

「オーナー」

エリンデの呼びかけに、わかってる、とだけ返してドレイクは青年の元へと歩いていく。

「やー、カジノの人？　悪いけど、このお兄さん介抱してやってくんない？」

ドレイクは黙ったまま、青年から気絶したチンピラを受け取り抱える。年老いた外見に見合わぬ力に、青年の目が丸くなる。

「すごいなオッサン。昔なにかやって――」

「あんた、どこのもんだ？」

「え？」

「マフィア……じゃないな。猟兵（イェーガー）崩れ、ってところか」

青年の表情から笑みが消えた。

「……どうして」

「マフィアは力を見せつける。見せつけることで相手を意のままにする。しかしあんたが使ったのは、自らの手の内をさらさず、一撃で相手の戦闘力を奪う技だ。そんな技が使えるのは、このあたりじゃ国境警備隊ぐらい。……だが、ここに遊びに来るような警備隊の連中はみな常連ばかりでね。それに……」

神妙な顔で聞き入る青年に、ドレイクは言葉を続けようとした。だが、思いとどまった。

「いや、いい。とにかく騒ぎを収めてくれたことは感謝するが、相手が悪かったな」

「相手？」

「流れ者じゃ分からないと思うが、こいつはマフィアの手下でな」

「そいつは」

と言って、青年は困り顔をした。面倒はごめんだ、と顔に書いてあるようだ。

「だから居なくなれ」

え、と惚け顔の青年に向かってドレイクは言った。

「あんたがここから消えてくれれば、丸く収まる」

青年は何かを言いかけたが、すぐに口をつぐんで、踵を返した。大きな背中を、丸めて歩き出す。

「おい」

と、ドレイクが声をかける。

なんだよ、と青年が振り返ると、ドレイクは一枚のチップを投げてよこした。青年はあわててキャッチする。手にしたチップを見ると、１０００ミラ相当の高額チップだった。

「ほとぼりが冷めたらまた来い」

その言葉を聞き、青年は笑った。それまでの張りついたような笑い顔ではなく、気持ちの良い笑顔だった。

「ランディだ」

そう名乗った青年は、踵を返すとひらひらと手を振りながらカジノハウス《バルカ》の階段を降りていった。

二週間後。

ドレイクは、カジノの休憩スペースでグラスを磨いていた。

このような雑事は他の店員に任せてもよいのだが、ディーラーには自分の仕事に専念してもらいたいと考えていた。なにより、気の滅入るような会計処理の合間にする単純作業が、ドレイクは嫌いでは無かった。
念入りにグラスを磨いていると、ひとりの青年がやってくるのを視界の端にとらえた。
「よう、あんたオーナーだったんだってな」
ランディと名乗った青年は、顔を赤らめていた。アルコール香が、酒量を物語る。
「ご機嫌だな、ランディ」
「おっ？　名前覚えてくれたのかい？　うれしいねぇ～」
そう言うとイスに座り、手にしていた紙袋を、どん、とカウンターに置いた。それをジロリと見やるドレイク。
「俺からの礼……あいや、違うな。迷惑料ってところか」
どうやらランディは、この前の騒動のお詫びとして、何か持ってきたらしい。
こっちが助けてもらったのに、ヘンなところで律儀なやつだ。ドレイクは内心でそう思ったが、もちろん表情には出さない。そのまま紙袋を開けて、中身を取りだした。
それは、酒瓶だった。中身はウイスキーで、レミフェリア公国の有名なブランドのものだ。
「結構高かったんだぜ？　でも店のオヤジがなかなか気前良くて、パカパカ試飲させてくれてさ。その男気にこっちも応えなくちゃならねぇ！　ってんで……おい、どうしたんだ？」
ランディは、とても苦々しい顔をしているドレイクに気づき、言葉を止めた。ドレイクは、ひと言。
「掴まされたな」
えっ、と言うランディの言葉を無視し、ドレイクは背後の棚からウイスキーの瓶を取りだした。同じラベルのものであるが、よく見ると瓶の形は微妙に異なっている。
「あちゃー、同じのもう持ってたのか」
大げさなリアクションを取るランディの言葉を無視し、ドレイクはグラスを二つ並べ、ひとつにはランディが持ってきたウイスキーを、もうひとつには自分が棚から出してきたウイスキーを入れ、音もなくランディの前に差しだした。
ランディはきょとんとした表情で、それらふたつのグラスを見やる。
「飲んでみろ。まずはおまえが買ってきたものから」
「俺、ロックの方が好きなんだけど……」
「冷たくすると味が分からなくなる」
不機嫌そうに言って、黙るドレイク。仕方なくランディは、自分が持ってきたウイスキーの入ってるグラスに口を付けた。
「んん、これこれ！　はー、やっぱうめぇな！」

ドレイクはそれには答えず、トントンとカウンターを指で叩いた。自分が棚から出したものを飲め、とジェスチャーをしている。
「そんなに急かされなくっても、飲みますって……」
そう言いながらランディはもうひとつのグラスを手に取り、口にした。その瞬間、思わず目を見開く。
「……なんだ、これ。全然別モンじゃねぇか！」
「ほう、それぐらいの違いは分かるのか」
「分かるもなにも！　なんだよこれ、あんたの出してくれたものの方がぜんっぜん美味い！　深みが違うっつーか、俺が買ってきたのが、まるでションベンみてぇって言うか……」
ドレイクは咳払いをして、ランディの下品な言葉を遮る。
「他のお客様もいらっしゃることを忘れるな」
ランディは、悪ぃ、と片手を上げて謝った。
「にしても、同じものとは思えないな……」
「同じじゃない」
「えっ？　だって、同じブランドだし、ラベルも同じだし……」
ドレイクは、ランディの持ってきた瓶と、自分の手持ちの瓶をカウンターに二つ並べてみせた。
「この銘柄の最上位ブランドは、ブルータイって俗称がついてる。ラベルに、青色のタイみたいな意匠が入っているだろう。レミフェリア公国のとある貴族がお墨付きとして与えたもんだ」
「それは店のオヤジから聞いたぜ。『ブルータイは最高のウイスキーの証だ！』って」
「ここの蒸留所は、その貴族によって保護を受けていると同時に、出荷量を厳しく制限されている。最高のウイスキーしか世に出してはならぬ！　ってな。その量は、年間５００本。……いっとくが、クロスベルでもめったに出まわらない貴重な酒だ。ちなみに、ここの蒸留所からちょいと離れたところに、別の蒸留所があってな。このブルータイに似た味で、瓶の形も結構似てる。値段は、十分の一以下だが、飲んべえ共には違いが分からない」
そこまで聞き、ランディも事の次第がわかったらしい。表情がみるみると微妙になっていく。
「じゃあ何か？　俺は……」
「しかしまぁ、キレイにラベルを貼り替えるもんだな」
ドレイクのその言葉で、ランディはカウンターに頭を打ちつけた。
「ハメられた～！」
そう言って、やおら席を立ち、自分が買ってきた方の酒瓶を掴む。
「いっとくが、警察に行っても動いちゃくれないぞ。そうい

うことになってる。この街じゃな」

　ドレイクのその言葉で、ランディは思わず立ち止まる。

「それに、イカサマってのは騙される方も悪い」

「けどよぉ！」

　ドレイクは自分の手持ちの方のウイスキーが入ったグラスの中身をあおった。そしてグラスを静かに置く。

「こんな商売してると、そういう考えが身についちまう。……が、世の中渡ってくなら、案外役に立つもんだ」

　ドレイクの言葉に、頭に血が上りかけていたランディも我に返る。再びイスに座り、ドレイクに向き合った。

「とりあえず、酒の飲み方ぐらい覚えろ。ここなら、本物の酒を静かに飲める。もちろん、お代はいただくがな」

　そう言いながら、ドレイクは慣れた手つきで氷水の入ったグラスを差し出す。

「……営業活動にご熱心なことで」

　ランディはそう言って、氷水に口をつけた。

「あぁ、ちなみにさっき飲んだ本物のブルータイだがな、あれは一杯３０００ミラだ。ツケにしといてやる」

　気管に水が入ってむせるランディの咳き込む音を聞きながら、ドレイクはグラス磨きを再開した。

　それから数週間後。

　夜も深い時間、そろそろカジノで粘る客も少なくなり、店じまいかという頃。

　ドレイクはいつものように店の中を見回っていた。

「あ、ランディさんだ～」

　鼻にかかったような甘い声は、コイン交換カウンターのチェリーのものだ。その声に、よう、と応える声。

　やれやれ、と思いながら声のした方に向かう。

「狸オヤジ自ら出迎えとは」

「悪いがランディ、そろそろ店じまいの時間だ。飲ませる酒はないぞ」

　そう言いながら、ドレイクは奇妙な違和感を覚えていた。いつもの調子で減らず口を叩いているランディだが、雰囲気が違う。

　この数週間、ランディは毎日のように《バルカ》にやってきては酒を飲み、ドレイクと話をしていた。

　ほとんどは酒についての話。ドレイクは先日手痛い授業料を払ったランディに、自身の持つ酒に関する多くの知識と、ほんの少しの酒飲みの哲学を教えていた。ランディは毒づきながらも、ドレイクからのレクチャーを楽しんでいた。というより、単におしゃべりをすることを楽しんでいた――そのようにドレイクはとらえていた。

　会話の最中、たまにランディの素性に関わりそうなことに話題がおよぶことがあった。例えば、生まれ故郷で作られた酒は美味しく感じやすい、という雑談から、生まれ故郷を尋ねたりとかだ。だがそういう時はランディは決まって、少し困ったような笑顔を一瞬見せてから、いつも以上におどけて、質問をはぐらかした。

『俺は生まれた時から世界じゅうを旅してきたから、どんな酒もこよなく愛せるのさ』

　そんな口を叩く時のランディを見て、ドレイクはただあきれるだけで、この青年が隠したがっている過去について積極的に触れようとはしなかった。そんなことをされるのはまっぴらだ――もし自分が同じ立場に置かれたのならそう言い返すからだ。

　だからドレイクとランディの関係は、ただのカジノのオーナーとそこに足繁く通う、ちょっと変わった常連客、というものでしかなかった。

　だが、今日はいつものランディとは少し違う。会話を楽しもうという雰囲気ではなく、もっとシリアスな話をするつもりらしい。そして、それがどうやら、ランディが左手に持っている傷だらけのトランクにまつわるらしいことを察した。

　ドレイクの視線がトランクに注がれているのを意識しながら、ランディは少し声のトーンを落として言った。

「そう言うなよ。……ちょっと、話があってな」

　ドレイクは軽く鼻をならし、休憩スペースへと向かって歩き出した。ランディも黙って、それについてくる。

　ドレイクはカウンターに入り、いつもの流れるような手つきでグラスに氷を入れる。ランディが一番気に入ったジンを注ぎ、炭酸水を注いでステアする。

　定位置である席に座ったランディはジントニックを受け取り、口を湿らせる程度飲み、グラスを置いた。

　少しの間、ふたりの間に沈黙が流れる。遠くでスロットマシンが動いている音だけが響いていた。

　やがて、意を決したように、ランディが言った。

「今日はひとつ、頼みがあるんだ」

　ドレイクは答えず、軽く眉毛を上げる。続きを言え、ということだ。この数週間ですっかり相手の言わんとしていることが分かっているランディは、そのまま続けた。

「クロスベルの国境警備隊に入ることにしてさ。ほら、さすがに食い扶持がないとしんどいっつーか、働かざる者食うべからずっつーか」

「それで？」

　少し声のトーンがあがったランディ、それを押さえつけるかのようなドレイクの声。

　ランディは、床に置いたトランクに目をやりながら、言った。

「――何も言わずに、こいつを預かってほしいんだ」
　ドレイクは直感した。
　これは、厄介な代物だ。血と硝煙の匂いがする、という分かりやすい類のものではない。だが、これは目の前にいる、どこか底を明かさない青年の過去に、秘密に繋がっている。そしてその青年の背後には、猟兵団の影がちらついている。
　これを預かることで、様々な災厄を呼び寄せる可能性がある。
　なるほど、これを持って国境警備隊には入れない。あそこは寮生活が基本であり、隊員のプライバシーは最低限しか保証されない。こんな大荷物を持っていたら、それだけで怪しまれてしまう。ましてや、その中身を明かせない、ヤバいものが入っているならなおさらだ。
　いいや、そうじゃない。ドレイクは気づいた。
　おそらくランディがここに持ち込んだのは、そういう理由もあるが、もっと根本的な問題だろう。
　この荷物は、ランディの触れられたくない過去に直結しているに違いない。それを見ず知らずの他人に預けることは、奴の心の最もなぞられたくない部分を晒すことになる。そんなことが出来るほど、目の前にいる青年は図太くも、老いてもいなかった。
　おそらくその傷は、生々しすぎるのだ。そしてランディの心は、柔らかすぎた。
　ランディはじっとドレイクを見つめていた。次の言葉を待っているのだろう。
　ドレイクはひとつため息をつくと、ケースに目をやりながら言った。
「期間は？」
「……いいのか？」
「自分で持ち込んでおいて、なにを言っている。で、いつまでだ？」
「少なくとも、俺がクロスベルにいる間は」
　長いのか短いのかまるで分からないな、とドレイクは思った。とはいえ、それで断るつもりはもとよりない。ただ、部屋に置くか、それとも納屋にでもつっこんでおくか、期間によって決めようとしていただけだった。
　なんにせよ、話はまとまった。ドレイクはカウンターから出て、ランディの置いたケースを持ち上げようと、持ち手に手をかけようとした。
「それと」
「まだなんかあるのか？」
「……俺が死んだら」
　神妙な顔つきでランディは続ける。
「中を開けて、ジャンク屋あたりにバラして売っぱらってくれ」
　今度はドレイクがランディをじっと見つめる。ランディは、ただ無言で見つめかえした。
「面倒な預かり物を頼んだ上に、万が一の処分までとは」
「あんたにしか頼めないんだ」
　普段のおどけた表情からは想像も出来ない、まっすぐで、少し危なっかしさを感じるまなざし。それを受け止めて、ドレイクは言った。
「報酬は」
　ランディは、胸元から何かを取りだし、ピンとはじいた。弧を描きながら飛ぶそれを、ドレイクは右手でキャッチする。手のひらを開くと、そこには以前に渡した１０００ミラのチップがあった。
　そういえば、あの時の借りをまだ返してなかったな。
　ドレイクは思い出し、ニヤリと笑う。そこでようやく、ランディの顔にもいつもの笑顔が戻った。
　ドレイクは、今受け取ったチップをそのままランディへとはじき返した。
「ロハで引き受けてくれるとは、優しいねぇ」
「そいつが引換証だ。無くしたら相手がおまえでも渡さないからな」
　了解、と言ってまた胸元へとチップをしまう。それを見届けて、ドレイクは今度こそケースの持ち手に手をかけ、持ち上げようとして。
　まったく持ち上げられなかった。
「あぁ、言ってなかったけど、それすっげー重いから。持ち運ぶ時に腰痛めんなよ？」
　そう言ってニヤニヤ笑うランディの顔を見ながら、ドレイクは怒鳴った。
「だったら自分で運べ！！」

つづく

小説版

零の軌跡 ショートストーリーズ

田沢 大典

ランディの章 後半

ヤツと初めて会った時のことを思い出すなんてな、と思いながら、ドレイクはいつものように、カジノハウス《バルカ》にあるバーのカウンターでグラスを磨いていた。

これだけは、どれだけ長くいる店員がいたとしても、譲らない仕事だ。例えそれが、カジノの売上を調べた後、夜中になったとしても、彼はひとりでグラスを磨いていた。日課であり、今さら誰か他の人間にグラスを触らせるのも、なんだかシャクだから、というぐらいの理由である。

時間はすでに夜中の三時を回り、カジノ内も人影はまばらだ。そこに、その男は突然現れた。

「よっ」

予知夢かよ、とドレイクは自分にあきれる。

「なんでぇ、まだくたばってなかったのか」

「おかげさまで。っつーか、それが客に対する態度かぁ？」

「お客様？ フロアの方にはいるが、このあたりにゃあ客なんぞひとりもいないだろうが」

「オヤジ……働き過ぎてついにボケちまったか」

わざとらしい鳴き真似をするランディを無視して、ドレイクは磨いていたグラスをことり、とランディの前に置く。なにを飲むか？ という無言の合図だ。

「今日はとびきり上等な奴をくれよ」

「そんな酒をドブに捨てるような真似は出来ねぇ」

「酒だって俺みたいな人間に飲まれれば本望だろうさ」

「言ってろ」

ドレイクは悪態をつきながら、ランディに背を向け、酒瓶の並んだ棚を見る。

何かある。

そうドレイクは睨んだ。しらふで、そのくせ口数が多い。普段のランディを知る人間からすれば、なんてことのない変化だろうが、ドレイクはその変化に何かひっかかりを覚えた。

その感覚が何か確かめるために、ひとつの酒瓶に手を伸ばす。ごく自然な位置取りでラベルが見えないようにし、ランディの目の前に置かれたグラスに琥珀色の液体を注ぐ。

ランディはグラスを持ち、軽く香りを楽しんだ後、ひと口つける。と、そこで目を見開いた。

「こいつは……」

驚くランディの表情を見やり、ドレイクが言った。

「分かったか」

「分かったもなにも、忘れるわけがねぇよ。あんたにはじめて飲ませてもらったやつだ。パチモンじゃねぇ、本物のブルータイ」

ドレイクは目を細める。

「舌だけは一丁前になったらしいな」

ランディはその悪態には答えず、ふた口、三口と飲み、琥珀色の液体を愉しんだ。

「……美味い」

空になったグラスを愛おしそうに見つめ、つぶやく。まるでそれが、最後の晩餐に出てくる酒であるかのように。

その様子を見て、ドレイクは自分の中で確信を深めた。

「こんな上物を飲ませてもらったんだ。お代は弾まないとな」

そう言ってランディは、懐に手を入れ、一枚のチップを取り出す。

そのチップを見ても、ドレイクは顔色を変えなかった。以前自分が引換証として渡した、1000ミラのチップ。

「こっちだ」

首を振って促す。ランディはグラスを静かにカウンターに置き、ドレイクの後に続いた。

ドレイクはオーナー部屋にランディを通した。そして、執務をする机の横に置かれ、ホコリをかぶっている大きく古ぼけたトランクに目をやる。

これは災厄を運んでくるモノ。これを預かった時は、確かにそう感じていた。

そして、断片的に漏れてくる情報、遠くの街からの流れ者のぼやき、マフィア達との避けようのないぶつかり合いの中で、ドレイクはランディの正体にひとつの確信を得た。

「うわ、きったね」

そう言って取っ手のホコリを払う。この一見陽気に見える青年の抱える過去、その闇は暗く、重い。

そして残念ながら、その闇を打ち払うだけの力も気概も、

自分にはすでに失われたものだった。

残念ながら、だって？

ドレイクは自分の心に問いかける。どうやら自分は、いつの間にかこの青年のことを、そんなにうっとおしくは思っていなかったらしい。

多くの客を相手にし、それゆえ誰とも深く関わることを辞めた、自分がだ。

いま思えばそれは当たり前のことなのかもしれない。誰とも深く関わることを辞め、ひとりで生きてきた。つまり、自分とランディは似ている。残念ながら。

「本当に残念だよ」

思わずつぶやく。その声に、ランディがハッとなる。その表情に、一瞬痛みに似たものが走る。

そういう意味じゃない、と否定しようとして、ドレイクはやめた。代わりに、手のひらを差し出す。

ランディは神妙な顔をして、ドレイクの手のひらの上に、かつて手渡された高額チップを置いた。

「確かに」

握り込み、腰のポケットへとしまう。それで、手続きは終了した。

ランディは、トランクをさも軽そうに持ち上げる。それじゃ、と軽く言い放ち、ドアに向かおうとしたが、振り返った。

「そのよ、ないと思うが、もし……」

ランディの視線が泳ぐ。対照的に、ドレイクはじっとランディを見つめていた。

「もし、支援課の連中が来ても……黙っててくれないか？」

伏し目がちに話すランディ。なので、彼の感情はあまり伺いしれない。ドレイクはその様子を見つめ、沈黙で返答をした。

「……それじゃ」

ランディはドアから出て行こうとする。ドレイクはかけるべき言葉を探したが、見つけることはできなかった。

ドアを閉める間際、立ち去る男の横顔は、ドレイクの知らない、ひとりのイェーガー猟兵のものだった。

その翌日。

ドレイクがいつものようにカジノで仕事をしていると、客人が尋ねてきた。

「これは皆さん」

ロイド達をはじめとする、特務支援課の面々だ。だが、そこにいつもいるはずの男がいない。

一瞬、別れ際に見せた、伏し目がちの顔を思い出す。そしてその時頼まれたことも。

だが、ドレイクはひと呼吸でそのことを飲み込み、続けた。

「……もしや、ランディの件でいらっしゃったんですか？」

「やはり彼はこちらに？」

ロイド達の顔に、やはり、という確信が広がる。

ランディの切実な願い。それを一瞬の逡巡だけで反故にしてしまったのは、簡単な理由だった。

ロイド達の表情は真剣さと共に沈痛さも含んでいた。それは、戦力がひとり減ったから、というものではない。大事な仲間、かけがえのないものを失おうとしている、その切羽詰まった意識からだった。

悪いな。だが俺は言わないとは約束しなかったぞ、と形だけ心の中で謝り、ドレイクは話を続ける。

「ええ、夜中の3時くらいに店にフラリと現れまして……。しばらくここで飲んでから帰って行きましたが」

支援課の面々は、顔を見合わせながら、まっさきにここに来たみたいだ、などと話をしている。

やはり支援課には戻らなかったか、などとドレイクが考えていると、ひとりの青年、確かワジと名乗る男が、尋ねてきた。

「それで、その後どこかに行くとか言ってなかったかい？」

「いえ、どこに行くとは特に言っていませんでした。ただ、どうも飲んでいる最中、いつも以上に減らず口が多くて……」

ここから先を言うべきか。今までのドレイクなら決して口を割らなかっただろう。だが、いまは彼らに、ロイド達にベットしたい賭けたい気分だった。

「おまけに帰り際、ある物を私から引き取って行ったんです」

「ある物……ですか？」

「ええ。随分重いトランクで中身は私も存じません。2年前、ランディがこの街に来たばかりの時に預かったんです」

そこまで一気に言って、ドレイクはひと呼吸置いて、ゆっくりと告げた。その言葉の意味を、正しく受け取ってもらうために。

「『俺が死んだら、ジャンク屋あたりにバラして売り払ってくれ』と言って」

ロイド達の顔に、明らかな動揺が広がる。当たり前だ。自分が死んだら処分して欲しい、と言っていたものを引き取るということは、死を覚悟した、ということだからだ。

「そんな……」

「ランディ先輩……」

「……らしく無さすぎです」

女性陣から悲痛な声が上がるのを聞いて、不謹慎ながらドレイクは妙におかしくなった。

なんだ、おまえ、ちゃんとモテてたんじゃないか。しかも、タイプは違えど、どの子もお前のことを本気で心配している。まぁ、色恋じゃあないところが残念だが。

対象的に、リーダーであるところのロイドは、黙って何かを考えている。この事態になっても、驚きはすれど取り乱しはしない。なるほど、あのランディがリーダーと見込んでついていくだけのところはあるな、とドレイクは考えていた。

彼は、カジノのオーナーではなく、ひとりの友人として、ランディについて話をすることにした。

「……ヤツの経歴については、私もある程度は存じています。ですが、過去にどんな事があったのかまでは知りません」

知り得ることもできたが、それは避けてきた。それを引き受けるのは、自分ではないと思い込んで。だから結局、若い人間に託すことしかできない。

「それを知ってヤツの力になれるのは、恐らく、皆さんだけでしょう」

そう言って目を閉じる。そこにあるのは、わずかばかりの悔恨と、自分のツケを払ってくれる若者への敬意。

いや、そもそも彼らは、ツケだとは思わないだろう。自分達が助けたいから助けるのだ。その無鉄砲さ、ほとばしる情熱こそが、彼らを突き動かす。そしてその熱は、きっと閉ざされてしまったヤツの心をこじ開けるだろう。

「……はい。そうありたいと思います」

ロイドの力強い言葉を聞いて、ドレイクは自然と頭を下げた。

「よろしくお願いします」

それから、しばらくの後。

クロスベルが独立国を宣言したり、それが無効になったり、テロリストに襲撃されたり、そのせいでカジノどころか街自体が大変なことになったりと、いろいろなことがあった。

だが、いちカジノオーナーであるドレイクは、ただ粛々と、精一杯、日々を生きていた。

風の噂で、一連の大がかりな事件の解決に、特務支援課の面々が大きく関わっているらしいことを聞いたが、それを本人達に確かめる術もなく、日々は過ぎていった。

そして、いつものように、ドレイクが夜にカウンターでグラスを磨いていると。

「よっ」

その男は、ひょっこりと顔を出して、ドレイクの目の前のカウンター席に陣取った。

「ご活躍だったそうじゃねぇか」

ねぎらい2、皮肉8の割合で声をかける。と、ランディは漬けすぎたピクルスを食べた時のように、眉根を寄せた。

「心にも思ってないこと言うんじゃねぇよ、狸オヤジ」

ククッと笑うドレイク。

「すっかり顔を出さないんで、せいせいしてたんだがな」

そう言いながらも、ドレイクはランディの前にグラスを置いた。そして、どの酒を注ごうかと背中を向ける。

「おっと、今日は俺のおごりだ。グラス、もうひとつ出してくれ」

は？　と声を出しながら振り返ると、そこにはひとつ酒瓶が置かれていた。

「……そいつは」

「今度こそ正真正銘の本物、ブルータイだぜ」

ランディの置いたその酒瓶を手に取り、ラベルを見る。

「おまえ、これ」

値段もだが、市場に出まわる数の少なさを考えれば、いつでも買えるものではない。おそらく、これを手に入れるのを待つために、ここに顔を出さなかったのだろう。

「今日は特別に！　お裾分けしてやるぜ」

「……いらねぇ」

「ちょ!?　せっかく持ってきたのに!?」

「おまえに借りを作るぐらいなら、指をくわえて見ている方がマシだ」

他愛もない軽口の叩き合い。だが、以前ここに来た時と違い、ふたりの間に妙な緊張感はない。

「かーっ！　人の好意を素直に受け取れないって、これだから狸は！」

そう言いながら、ランディはドレイクの持つ酒瓶を奪おうとする。が、ドレイクはひょいと身をかわして避けた。

「いらねぇ。が、おまえがまた偽物を掴まされたんじゃないかと心配なんで、味見してやる」

そう言いながら、手早く栓を開け、グラスに注ぐ。ひとつは自分の手元に置いたグラスに。ひとつはランディの目の前に置かれたグラスに。

グラスに琥珀色の液体が注がれるのを仏頂面で眺めるランディ。

「オヤジのツンデレなんてうれしくねっつーの」

そしてグラスを手に取った。同じくグラスを手にしたドレイクに、ランディが言う。

「……世話、かけたな」

「何のことだ？」

ドレイクの物言いに思わず苦笑しながら。

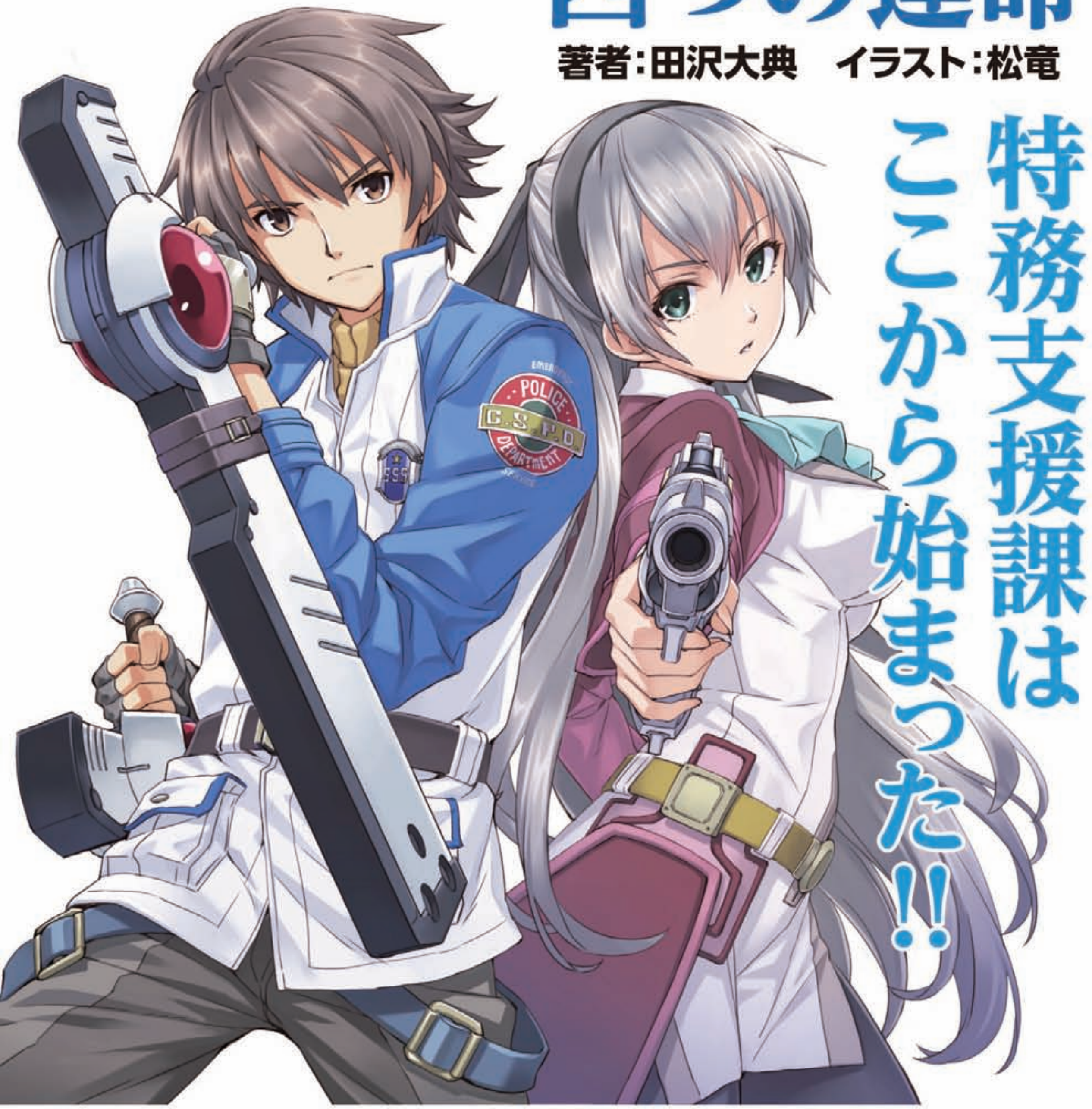
「乾杯」

「乾杯」

そうしてふたりはグラスをあおった。

琥珀色の液体が、喉を通り、芳醇な香りを鼻孔に運ぶ。

ＢＧＭは薄く流れるジャズと、遠くで鳴るカジノのスロットの派手な音。
ふたりの間には、心地良い沈黙が流れる。
その沈黙をやぶり、先に口を開いたのは、ランディだった。
「……なぁ、これ」
「言うな。……言わなきゃ、偽物だってバレねぇ」
「言ってるじゃねーか！」
また騙されたー！　と席で騒ぐランディを見て、カジノに興じていた何人かの客が何事かとこちらを見る。
その様子を見ながら、ドレイクは思うのだった。
まだまだこいつには、酒のことを教えてやる必要があるな、と。

ファルコムBOOKS
英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者：田沢大典　イラスト：松竜


©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら www.field-y.co.jp

創業者の加藤が
「いつまでもうちだけが、このままだと思うなよ」
と言ったのを覚えています。 ――近藤季洋

FB ファルコムBOOKS



『月刊Falcom magazine』誌上に掲載されたロングインタビューを完全収録。社長・近藤季洋や日本ファルコムのゲームミュージックを演奏するjdkバンドのボーカル・小寺可南子など、ここでしか読めないファルコムの『今』が満載！

- ●日本ファルコム代表取締役社長：近藤季洋
- ●OVA版『英雄伝説 空の軌跡』アニメーション監督・演出家：橘正紀
- ●OVA版『英雄伝説 空の軌跡』脚本家：上江洲誠
- ●ファルコムjdkバンド ボーカル：小寺可南子 ほか

日本ファルコムの『今』と『これから』がこの1冊に！



Falcom Long Interview
ファルコムロングインタビュー

全国書店にて大好評発売中!!

価格：1,155円（税込）
ISBN:978-4-89610-232-1

©Nihon Falcom Corp. All right reserved.

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

FB ファルコムBOOKS

英雄伝説 零の軌跡
午後の紅茶にお砂糖を

著者：むらさきゆきや
イラスト：窪茶



日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『零の軌跡』・『碧の軌跡』の主人公【特務支援課】の日常は意外とまったり!? 本編とは一味違った彼らのゆる〜い毎日を描いて『月刊Falcommagazine』で大人気を博したノベライズがついに単行本で登場！

12月6日発売!!

価格：1,155円（税込）
ISBN：978-4-89610-255-0

©Nihon Falcom Corp. All right reserved.

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

人生半キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります!

「英雄伝説閃の軌跡　オリジナルサウンドトラック」





岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤裕央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

新年が明け、はや一月。皆様はいかがお過ごしであろうか。

僕はと言えば、年明けから何故かブランディッシュ～ダークレヴナント～を開始。98の頃から考えれば何周もプレイしているので、今回は素手＋復活の指輪無し＋踏破率100％を目指し、現在フォートレスに至ったところである。素手でプレイする事で、武器は全て売り払えるので、かなり早い段階からほとんどの魔法を手に入れる事ができ、しかもSTRは猛烈に上がっているから、通常攻撃も問題なく使用できる。かなり厳しいと予想されたダークゾーンもそんなに苦労する事なくクリアする事ができた。どう考えても素手でプレイする事を想定したゲームバランスになっていて驚愕である。このまま無事にガドビスタルを素手で殴り倒してみようと思う。まさに殴りに行こうぜ!である。

もう数時間もプレイすればクリアできるとは思うのだが、ところが、いつまでも正月モードで遊んでいるわけにはいかないのであった。

そう、私には、「閃の軌跡」を1月25日までにクリアしなければならないという、特別実習課題が用意されていたのである!　ドドーン!

このコラムが掲載されるファルコムマガジンが発売の頃には、すでにイベントは終了しているのではあるが、来る1月25日には新宿ロフトプラスワンにて「Falcom Acostic Live& TalkShow」というイベントが催され、そこでは軌跡シリーズの生みの親である近藤社長とのトークショーが控えているのだ。しかもサシで。

そして今回のイベントの目玉はなんと「閃の軌跡続編タイトル発表!」である。……どう考えても、これは閃の軌跡はクリアしていないとお話にならない。たとえ、このコラムの原稿の納期が押したとしても、最優先で閃の軌跡をプレイしなければならないというわけだ!　……ああっ!　担当者さん、殴らないで!　物投げないで!

でも、その甲斐あって、つい先程無事に閃の軌跡クリア致しましたーー!

この原稿を書いている現在、2014年1月24日。イベント前日である。もちろん、あと数時間後には、担当者さんに丁寧なお詫びのメールと共にこちらの原稿を入稿する予定だ。

いやあ、しかし長かった。結局クリアまでに80時間以上かかってしまった。可能な限りのサブクエストなどもこなし、お気に入りのキャラクターとの絆ポイントも稼いだりしたせいではあるのだが……。手作り弁当は反則だよ、ラウラ……。ラウラかわいいよラウラ……。

しかし、自分が担当した楽曲が軌跡シリーズの最新作から流れてくる感動は、何にも変えがたいプライスレスな体験であった。発売前から色々なイベントなどで公言していた「FM音源を使った楽曲アレンジ」も結構違和感なく、世界観にはまっていたとは思うのだがいかがだっただろうか。ちなみに、僕が担当した楽曲でFM音源のサウンドを使ったのは、前半旧校舎ダンジョン「探索」、ケルディック街道等、フィールドのBGM「異郷の空」、高速巡洋艦カレイジャス登場シーンで流れる「紅き翼 -新たなる風-」の3曲。中でも「探索」という楽曲では、レトロでPC88ライクなPSG音源のサウンドも織り交ぜている。

はてさて、どれ位のプレイヤー達がこの事に気づいてくれたかは分からないが、生楽器や最新のシンセ音源とも、なかなかに調和がとれたサウンドになったのではないかと自負している次第である。

この辺りの事を踏まえた上で、オールドユーザーの皆様にも、絶賛発売中の「英雄伝説閃の軌跡 オリジナルサウンドトラック」を聴いてみて頂きたいと思う。聴きこんでもらうと、「おお!?」っと思ってもらえる音が満載なのだ。

それではまた次回お会いしましょう!



「英雄伝説 閃の軌跡 オリジナルサウンドトラック」
PS3/PS Vita「英雄伝説 閃の軌跡」の劇中使用曲全87曲を収録したCD4枚組アルバム!
ファルコムjdkバンドボーカル・小寺可南子が歌う主題歌『明日への鼓動』、
エンディングテーマ『I miss you』を含む全87曲、トータル4時間超となる大ボリューム!!
■価格　4,095円(税込)／ＤＬ版：　3,000円(税込)
■収録曲：全87曲(ＣＤ4枚組)
■商品ページ　ファルコムオンラインショップ
http://www.falcom.co.jp/mailorder/catalog/m064.html
■DL販売サイト：iTunes、AmazonMP3、mora、music.jp、アニメロミックス
ファルコム楽曲4,227曲をiTunesで世界111ヶ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.

コテ放題

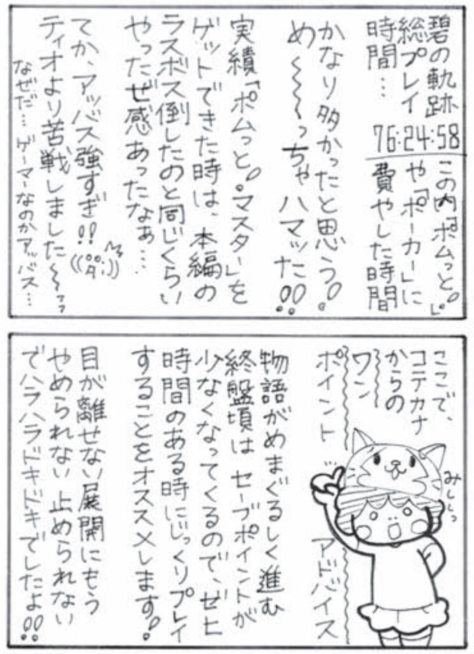
コテカナことjdkBANDボーカル小寺可南子がゲームと共に、好き放題な日々のことを描くコラム!!

第13回　特科クラスⅦ組しど…アレ?



▶PROFILE
日本ファルコムのゲームソングを奏でる専属バンド"jdkBAND"のボーカル。webラジオ「ファルコムラジオ"めんどくさいです…でもがんばります"」では声優水橋かおりさんと共にパーソナリティをつとめる。その他CMソング、ジングルなど活動は多岐に渡る。
twitter @cana_ko_tera

まいどドウモみなさま!コテカナです!。2014年初めの連載ということわけで、あけおめのことよろでございます! まだまだ続くよコテ放題!! さて、「碧えぼ」が今年の6月に発売予定ということで、碧の軌跡を終えたばかりですがもう今からPS Vitaでやる日を夢見てワクテカしています♪ あんなシーンやこんなシーンもフルボイスでプレイができるんだもの……!! 待ち遠しいですね!! 閃の続編や謎の新作(?)も発売が決定してるみたいですし、アニメも始まって今年もますますファルコムワールドから目が離せないい!





次回こそはいよいよ……『閃』……ね? やろ?



2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■**配信日**　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■**メインパーソナリティ**　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■**公式ホームページ**　http://www.falcom-radio.com/

第114回-第116回　佐藤拓也（『閃の軌跡』マキアス・レーグニッツ役）

114-116回は、続編も発表された最新作『閃の軌跡』でマキアス役を演じている佐藤拓也さんが初のゲスト出演。佐藤さんは『イース』シリーズで凄腕の傭兵・ガッシュを演じているということで、いろいろな方面で盛り上がった回となった。また、115回からは、今年の1月から放送されているアニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』のキャスト陣によるメッセージコーナーがスタート。アニメではガッシュを演じている佐藤さんのコメントももちろん今後放送されるので、楽しみに待っていてほしい。

▶第114回-第116回の舞台裏◀

アニメで久々にガッシュを演じた佐藤さんだが、キャラの性格や演技をきちんと把握しており、スムースに収録が行われた。キャラクターをきちんと理解し、愛しているからこそ、ファンからも長く愛されるキャラクターが生み出されたのがわかる象徴的なシーンだった。

今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！









©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. / chara-ani

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！





『Falcom Music Chronicle Special』配信

スペシャルなミュージックをゲットせよ！

昨年６月に発売されて以来ファンの間で話題となっているファルコムミュージックレビュー本『Falcom Music Chronicle』。６つのジャンルに分けて３００枚以上のファルコムミュージックＣＤを紹介したこの書籍に同梱されているスペシャルアレンジＣＤが音楽サイトにて配信中だ。ここでしか聞けない特別仕様のあの名曲たちを見逃すな！　iTunes・AmazonMP3・mora・アニメロミックスにて配信中。1曲150円。アルバム価格900円

●収録曲

1:『迷いの森 - アコースティックバンドアレンジバージョン -』(from 英雄伝説 III 白き魔女)
2:『STAIRS TO THE LIGHT -STAGE CLEAR- バイオリン & ギターアレンジバージョン』(from ブランディッシュ)
3:『星の在り処～告白』(from 英雄伝説 空の軌跡 FC)
4:『鉱山町マインツ - バイオリン & ギターアレンジバージョン -』(from 英雄伝説 零の軌跡)
5:『バレスタイン城』(from イース - フェルガナの誓い -)
6:『キングドラゴン～ソーサリアン・ザ・プレリュード』(from ソーサリアン)
7:『TO MAKE THE END OF BATTLE - ブラスバンドアレンジバージョン -』(from イース I&II クロニクルズ)

ANA国際線機内オーディオ ファルコム楽曲放送

雲の上でファルコムミュージックを！

ANA国際線に備えられた機内オーディオにてファルコムの楽曲が放送開始！「Game Music Selection」という番組内で『ふぁるこむフィールドざんまい』と『ふぁるこむボスざんまい』から選りすぐりの12曲が機内で楽しめるぞ。楽曲は機内誌、またはサイト内のデジタル機内誌（http://www.ana.co.jp/int/inflight/guide/music）でチェック！　放送期間は２月頭から３月末までの２ヶ月間。


機内誌サンプル

イース セルセタの樹海 PlayStation®Vita the Best

大人気シリーズ最新作がお手頃価格で！

昨年11月に北米版も発売され、海外でも高い評価を得た『イース セルセタの樹海』がBest版で登場！　Vitaライブエリアにアクセス、最新版のアップデートを適用することでPS Vita TVにも対応させることができる仕様となっている。日本ファルコムが誇る「イース」シリーズ最新作、この機会にプレイしてみるのはいかが？　3990円（税込）。





©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©ANA・ANAセールス

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



名取まち

軌跡シリーズが今年で10周年を迎えるにあたり閃の軌跡の続編、ファルコム学園のアニメ化等楽しいイベントが盛りだくさんでとても楽しみです！

『イースvs.空の軌跡 オルタナティブ・サーガ』(2010)

日本ファルコムの２つの名作シリーズのキャラクターが夢の競演を果したアクション対戦ゲーム。異世界ザナドゥに戦士達が召喚される世界観は『ファルコム学園』にも通じている。

©Nihon Falcom Corporation. All Rights Reserved.

ドラマCD『英雄伝説 零の軌跡』シリーズに収録された

抱腹絶倒必至で大好評の短編ギャグシナリオを一挙掲載！



キャラアニより2011年12月から2013年3月まで発売された
ドラマCD『英雄伝説 零の軌跡』シリーズ。その『第四章』と『終章』に収録された
短編ギャグドラマのシナリオを一挙掲載！ 『碧えぼ』の前に一度、
ドラマCDで『零』を振り返るのもオススメだ！

©Nihon Falcom Corporation. ／©Chara-ani Corporation.

■零の軌跡
本編ドラマCD オマケトラック

エリィとマリアベルの話
「マリアベルの愛のこもった看病（仮）」

【登場人物】
エリィ・マクダエル
マリアベル・クロイス
ロイド・バニングス

□エリィの部屋（朝）

タイトルコール

マリアベル「マリアベルの、愛のこもった看病」

熱を出して弱っているエリィを、心配そうに見守っているロイド。

エリィ「（咳）こほっ、こほっ！」

ロイド「大丈夫か？ エリィ。相当辛そうだけど」

エリィ「平気だから、ロイドは早く支援要請に向かって」

ロイド「そう言われても心配だな……。誰か看病してくれる人がいればいいんだけど……」

と、そこへ、テンションの高いマリアベルが登場。

【SE】扉が勢いよく開く音

マリアベル「ご機嫌ようエリィ!!」

エリィ「え？ ベル……？」

部屋の中の様子に気付かないまま、言葉を続けるマリアベル。

マリアベル「エリィの生涯唯一の大親友、このマリアベル！ 今日は珍しくオフになりましたの！ エリィと夢のような・楽園のような素晴らしい一日を過ごそうと、悪魔に魂を売る覚悟でやってまいりましたわ！」

やっとエリィの状態に気付くマリアベル。

マリアベル「って、あら？」

抱腹絶倒必至で大好評の短編ギャグシナリオを一挙掲載!

ロイドを突き飛ばし、エリィに近づくマリアベル。

マリアベル「ちょっと失礼！」

【SE】突き飛ばす音

ロイド「どあっ！」

【SE】吹っ飛ぶ音（どんがらがっしゃん）

マリアベル「どうしましたのエリィ！」

エリィ「べ、ベル……今、ロイドが部屋の端から端まで吹っ飛んだだけど……」

マリアベル「（無視）その潤んだ瞳、掠れた声……そして、わたくしにときめきを感じているのではないかと錯覚しそうな紅潮した頬っ。熱がありますのねっ」

エリィ「認識の仕方に問題がある気がするけど……その通りよ」

マリアベル「わたくしが来たからには安心してください。あなたが完治するように、優しーく、手厚ーく、時には黒魔術を用いて看病してさしあげますわ！」

エリィ「……黒魔術は、やめて」

吹っ飛ばされた状態から、やっと立ち上がるロイド。

ロイド「いってて……」

マリアベル「あら？ まだ居ましたの？ 女性の部屋に男性がいつまでも居座るものではありませんわ。ロイドさん、ハウス！」

ロイド「俺は犬⁉」

マリアベル「ここはわたくしに任せて、とっとと行ってくださいな」

ロイド「えーっと」

エリィ「ロイド、とりあえず……彼女に看病してもらうわ」

ロイド「わかった。それじゃあ、後はよろしくお願いします」

【SE】扉が閉まる音

マリアベル「（呆れ）ふぅ……行きましたわね」

ころっと機嫌が良くなるマリアベル。

マリアベル「さあ、ふたりっきりになれたところで、まずはわたくしにどのくらい熱があるのか教えてくださいな。（唇をつきだす）ん〜」

エリィ「ちょ、ちょっと、何してるの？」

マリアベル「額にキッスをして、熱を測らなければ！ 大丈夫ですわよ！ 痛くしませんわ！」

エリィ「ごほっごほっ！ か、看病するなら、もう少し普通にお願い……　……！」

マリアベル「恥ずかしがり屋さんですわね。仕方がありません。額と額をくっつけるだけにしてさしあげますわ」

エリィ「そうして……」

エリィの額に額を当てるマリアベル。

マリアベル「ん〜」

【SE】熱い物に触った、じゅっという音

マリアベル「なっ！」

エリィ「……？」

マリアベル「な、なんて熱ですの⁉ 今すぐ病院に行かなければ！ 救急車ー！ 救急車ー！」

弱っているが必死（命がけ）にマリアベルを止めようとするエリィ。

エリィ「ストップ、ストップっ！」

マリアベル「なぜ止めますの？ これは緊急事態ですのよ⁉」

なんとかマリアベルを止めようと、でっちあげるエリィ。

エリィ「そんなことしたら、余計ロイドに心配かけちゃう……じゃなくって、えーっと、びょ、病院に行ったら、ベルに看病してもらえないな〜……なんて」

マリアベル「（歓喜の息）まあ……！ （鼻血が吹き出る）ぶふっ！」

エリィ「え⁉ なんで鼻血⁉」

鼻血出しつつも、上機嫌なマリアベル。

マリアベル「(鼻を押さえながら)ふ、ふふ……あなたがそこまで言うのでしたら、このままわたくしが愛で……(念押し)愛であなたを救ってさしあげましょう」

エリィ「(ドン引き)ベル……ちょっと怖いわ」

※時間経過

【SE】氷の音

マリアベル「氷枕の中身を交換しましたわ。さあ、頭をあげてくださいな」

エリィ「ええ」

【SE】ベッドのきしむ音

マリアベル「はい、OKですわよ。えーっと……替えのパジャマはありましたし、タオルと飲み物も十分……と」

エリィ「(からかって)ふふ、ベルが人並みに看病できるだなんて、驚きだわ」

マリアベル「もう。人をなんだと思ってますの？ それにしても、自己管理をしっかりしているあなたが、熱を出すなんて……ロイドさん達に振り回されて大変なんじゃありません？」

エリィ「そんなんじゃないわ。私がまだまだなのよ」

マリアベル「……またそうやって庇いますのね。まぁいいですわ。今はわたくしに甘えて、ゆっくり休んでください」

エリィ「ありがとう」

マリアベル「お礼を言うなら、『ありがとう、やっぱり貴女は大親友だわ』くらい言って欲しいものですわね」

エリィ「そうね」

マリアベル「え？」

マリアベルM「こ、これは……！ エリィがとうとうわたくしを大親友だと証言してくれる運命の瞬間!?」

エリィ「ありがとう、貴女は……」

マリアベルM「(期待大)あぁ……！ ついに……！ 熱万歳！」

【SE】急いで扉を開ける音(バンッ)

慌てた様子で戻ってくるロイド。

ロイド「マリアベルさん！」

マリアベル「(不機嫌)……は？」

ロイド「すみません、薬の場所わかりませんよね？ 風邪薬は一階……(マリアベルの様子に気づく)……の」

マリアベル「(怒り)いいところで……うふ、ふふふふふ」

ロイド「(怖い)……あれ？ なんか、怒ってます？」

ロイドを吹っ飛ばすマリアベル。

マリアベル「二度と帰れぬところまで、飛んで行っておしまい！」

【SE】鉄拳を喰らう音

ロイド「ぎゃあああ！」

【SE】ロイドが星になる音(キランッ)

マリアベル「愛を邪魔するものには鉄槌を……ですわ」

了

■零の軌跡 本編ドラマCD オマケトラック

ブライト一家の話「ブライト一家の憂鬱（仮）」

【登場人物】
エステル・ブライト
ヨシュア・ブライト
レン

□ブライト家・リビング（朝）

タイトルコール
エステル「ブライト一家の憂鬱」
エステルN「レンと一緒にクロスベルからリベールへと帰ってきたあたしとヨシュア。ロレントの家で、仲良く楽しくすごそうとしてたんだけど……」
【SE】キィという扉の音
レン「それじゃ、行ってくるわ」
エステル「待ってレン」
レン「何？　エステル」
エステル「また森に行くの？」
レン「ええ。パテル＝マテルと遊んでくるわ。あの子だけいつも外の森にいるのは、かわいそうだもの」
エステル「ね、ねえ、今日は街の子も誘って行くなんてどう？　パテル＝マテルも、たくさんの子と遊びたいんじゃない？　それに、人数がいたほうが、色んな遊びができるし」
レン「私以外は、あの子の言葉がわからないじゃない」
エステル「そうだけど、遊ぶ方法はあるわよ！」
レン「例えば？」
エステル「（戸惑い）えっと……。だるまさんが転んだとか？」
レン「（冷たく）……ひとりで行くわ」

□ヨシュアの部屋（昼）

しょんぼりして、ヨシュアのところにやってくるエステル。
【SE】ノックの音
エステル「（おどろおどろしく）ヨシュア～」
この世の終わりのような顔をしているエステルに、驚くヨシュア。
ヨシュア「うわぁ！　エステルどうしたの!?　なんか、棒キャンディーを泥沼に落としたみたいな顔してるけど……！」
エステル「いや、そんな妙に具体的に表現されても……」
ヨシュア「ごめんごめん。暗い顔してどうしたの？」
エステル「レンがまたひとりで出かけちゃったの」
ヨシュア「パテル＝マテルのところ？」
エステル「うん……せっかくロレントに来たんだから、もっと子どもらしく色んな子と色んなところで遊んで欲しいのに」
ヨシュア「うーん、すぐには無理かもしれないね。今までのレンは、子どもらしさとはかけ離れた生活をしていたんだから」
エステル「あたし達にできることないかな？」
ヨシュア「（考え）そうだな……。何かレンが興味を持つような遊びを、教えてあげるとか？」
エステル「なるほど！　じゃああたしが直々に、レクチャーしようじゃない！」
ヨシュア「いいんじゃないかな。でも、どんなふうに？」
エステル「ふっふっふ……。それは――」
ヨシュア「僕の時みたいに、虫を採ってくるのはやめたほうがいいよ？」
【SE】凍りつく音
エステル「（図星）あ……えっと」
慌てて取り繕うエステル。
エステル「や、やぁね～あたしももう大人なんだから、そんなことしないわよ～。あは、あはは……」
ヨシュア「（呆れ）……やる気だったんだ」
エステル「（気をとりなおして）じゃあ、木のぼりとかどう!?」
ヨシュア「レンなら一瞬で登っちゃうよ」
エステル「（たじたじ）た、確かに。じゃあ、釣り？」
ヨシュア「いいかもしれないけど、レンはもっと女の子

抱腹絶倒必至で大好評の
短編ギャグシナリオを一挙掲載!

らしい遊びが好きだと思うよ?」

【SE】衝撃音

エステル「え!? 釣りって女の子らしくない!?」

ヨシュア「(戸惑い) そこで真面目に驚かれると、困るんだけど……とりあえず何か他にない?」

エステル「えっと、ええっと……(しばらく悩むAD)」

思いつかず、ギブアップするエステル。

エステル「あ〜! あたしに女の子らしい遊びを求められても、無理よ!」

ヨシュア「諦めないでエステル! きっと0.5個ぐらい何かあるはずだから!」

エステル「ひとつに達してないからそれ!」

いつの間にか背後にいたレンがツッコミを入れてくる。

レン「騒がしいわね」

エステル「レン!?」

レン「なんだか、あんまり笑えない夫婦漫才が聞こえたような気がしたけど?」

ヨシュア「え? どっちがボケでどっちがツッコミ?」

エステル「なんの会話をしてるのよ、ふたりとも……。ところでレン、早かったのね?」

レン「ええ、ちょっとね」

戸惑いつつも、エステルとヨシュアに摘んできた花を差し出すレン。

レン「(照れつつ) これを……ふたりにあげようと思って」

エステル「お花?」

レン「ルックとパットに綺麗なお花が咲いてる場所を教えてもらったから、摘んできたの」

ヨシュア「え? ふたりと会ったの?」

レン「ええ。街に出た時に会って、それからたまにお話をするわ」

エステル「いつの間に……。でも、せっかく摘んできたんだから、レンの部屋に飾ったら?」

レン「これはふたりへのお礼よ」

エステル「え?」

レン「(照れつつ) クロスベルまで迎えに来てくれた

お礼、ちゃんとしてなかったでしょう?」

ヨシュア「レン……」

レン「(改めて) ありがとう」

お花を受け取るエステル。

エステル「じゃあ、遠慮なく。とっても綺麗だわ、ありがとう」

レン「ふふ……確かに渡したわよ。それじゃあ、今度こそパテル=マテルと遊んでくるわ」

【SE】扉が閉まる音

エステル「あ……行っちゃった」

ヨシュア「どうやら、レンはレンなりに、今の生活に慣れようとしてるみたいだね」

エステル「そうみたい。ふふ、お礼をしてもらえるなんて、思ってなかった、嬉しいな。知らない間に街の子とも仲良くなっていたみたいだし」

ヨシュア「僕達の出る幕じゃなかったね。やっぱり年の近い子のほうが、いいみたいだ」

エステル「ふふ……そっかそっか。あの子達と仲良くなったんだ。あ、いつかレンがルックとパット達と、私とヨシュアみたいに仲良くなって……そのうち恋心が芽生えちゃったりして!」

と喜んでいるエステルに、ヨシュアの態度が変わる。

ヨシュア「え?」

エステル「(嬉しそう) 可能性がないわけじゃないわよね〜」

ヨシュア「(不機嫌) それはまだ早いよ」

エステル「そう?」

ヨシュア「レンに恋人とか、認めないから」

エステル「(戸惑い) ちょ、ちょっと。やーね。ものの例えだから」

ヨシュア「どうしてもって言うなら、まずは交換日記から……いや、違う、文通からだね!」

エステル「あの、ヨシュア?」

ヨシュア「(聞いてない) そして彼らの親族の調査から、将来有望なのかの判定をして……!」

エステル「(ちょっと怯えて) ヨシュア……目が本気だわ」

了

■零の軌跡
本編ドラマCD オマケトラック

ロイドとガイの話「バニングス兄弟の事情(仮)」

【登場人物】
ロイド・バニングス
ガイ・バニングス
エリィ・マクダエル
ティオ・プラトー
ランディ・オルランド
キーア

□特務支援課（朝）

タイトルコール
ガイ　「バニングス兄弟の事情」

特務支援課に、ロイドがガイのお墓参りから帰ってくる。

【SE】扉が開く音

キーア　「おかえりなさい、ロイド！」
ロイド　「ただいま、キーア」
ティオ　「おかえりなさいです。ガイさんと、ゆっくり話せましたか？」
ロイド　「まあね。ティオも一緒に来て良かったのに」
ティオ　「兄弟水入らずの邪魔はしませんよ」
ランディ　「しかし、早朝から墓参りとは、相変わらず兄さん大好きだよな」
ロイド　「茶化さないでくれよランディ。最近忙しくて、なかなか行けてなかったんだ」
エリィ　「本当に仲良しさんだったのね」
ロイド　「エリィまで……まあ、両親が事故で亡くなってからは、兄貴が親代わりだったからね」
ランディ　「なるほどな。でも親代わりってことはあれか？　お前、あの兄貴に対して反抗期とかあったのか？」

その言葉に、嫌なことを思い出すロイド。

ロイド　「う……」
ランディ　「ん？　なんだ、その微妙な顔は」
ロイド　「その……。確かに反抗的だった時期はあったような気がするんだけど……ちょっと色々あって」
ランディ　「んん？」
ロイド　「あれは、俺がまだ日曜学校に通ってる頃だったかな」

□ベルハイム・回想（朝）

【SE】ちゅんちゅんという鳥の鳴き声

回想開始。

ロイドが十歳程度で、日曜学校に行こうとしているのを、ガイが出てきて見送っている。
ガイは笑顔満開だが、ロイドは少し反抗期っぽく、不機嫌そう。

ガイ　「ロイド！　今日も頑張って勤勉に励んでこいよ！」
ロイド　「（呟く・以降幼め）朝から暑苦しいな、兄貴。……っていうか、見送らなくていいのに」
ガイ　「教科書持ったか？　筆記用具持ったか？　ハンカチとティッシュは？」
ロイド　「もう子どもじゃないんだから、心配しなくていいって」
ガイ　「そうだ、警棒は持ったか!?」
ロイド　「（ツッコミ）いや、普通持たないから！」
ガイ　「（急に真剣になり）本当に、何も忘れてないというんだな」
ロイド　「ああ」
ガイ　「ひとつ忘れ物があるぞ」
ロイド　「何？」
ガイ　「俺という名の守護霊を忘れている！」
ロイド　「ついてくる気かよ！　っていうか、いつから守護霊になったんだよ！」

つきあっていられなくなり、出て行こうとするロイド。

ロイド　「もう行くからな！　絶対ついてくるなよ！」
ガイ　「（残念そう）ええ？」
ロイド　「まったく……何考えてんだ……」

□教会・回想（夕）

【SE】子ども達が帰っていく足音

ロイド　「（疲れている）……やっと今日の授業も終わったなー。なんか今日は、いつもより随分疲れた気がするな……。きっと、兄貴が朝、あんなこと言ったからだ。あの兄貴なら、本当に隠れて着いてきても不思議じゃないからな……」

【SE】茂みの音

ロイド　「へ!?」

【SE】猫の鳴き声

ロイド　「（怯えて）なんだ……猫か。そうだよな、兄貴は仕事だろうし、俺の勘違いだよな。よし、今日はオスカーのところにでも寄って気分を変え——」

と、背後からガイの声が聞こえる。

ガイ　「（囁き）寄り道するなよ」

ロイド　「……!?」

慌てて振り返るが、ガイの姿はない。

ロイド　「だ、誰もいない……？」

ロイドM　「けど、今のはなんだ？　幻聴？　い、いやそんなわけない……まさか、本当に……」

ロイド　「ここは……逃げる!!」

【SE】走る足音

【SE】茂みから飛び出す音

ガイが茂みから登場して、驚くロイド。

ロイド　「い!?」

【SE】走る足音（ふたつ）、以降ずっと流れている

ガイ　「（爽やかに走りながら）どうしたんだ〜ロイド、走ると危ないぞ〜!」

ロイド　「（懸命に走りながら）だあああ!　やっぱりいたのか!　っていうか、ずっとついてきてたのか!?　仕事はどうしたんだよ!?」

ガイ　「速攻で片付けてきた!　早朝に!　ロイドが起きる前に!」

ロイド　「あほだろおおおお!」

ガイ　「心配だったんだよ!　最近のお前はどこかおかしい!　俺を無視したり、俺のこと兄ちゃんって呼ばなくなったり、俺と一緒に寝たがらなかったり!」

ロイド　「最近じゃなくても一緒に寝てないから!」

ガイ　「何か悩みがあるんだろう!　兄ちゃんに話してみろ!　勉強の悩みか？　将来の悩みか？　あ、もしかして恋の悩みか!?　兄ちゃん、ロイドにはまだ早いと思うぞ!?」

ロイド　「いい加減にしてくれ〜!」

【SE】走り去っていく足音（どんどん遠ざかっていく）

□特務支援課（朝）

回想終了。

ロイド　「っていうことがあってさ……」

キーア　「へ、へぇ……」

なんとコメントすればいいのか、わからないメンバー。

エリィ・ティオ・ランディ　「（複雑な息）……」

ロイド　「兄貴がそんなんだから、反抗する気力の方が先に尽きたんだよ」

エリィ　「ガイさん……ロイドのためにそこまでする人だったのね」

ティオ　「……そういえば、ガイさんが何かを話す時、大半がロイドさんのことだった気がします」

ランディ　「生粋の弟キャラの兄貴は、それ以上のお兄ちゃんキャラだったってことか……恐るべし、バニングス兄弟……!」

了

抱腹絶倒必至で大好評の
短編ギャグシナリオを一挙掲載！

■零の軌跡　本編ドラマCD オマケトラック

ダドリーの話「ダドリー捜査官の優雅な朝（仮）」

【登場人物】
アレックス・ダドリー
ロイド・バニングス
エリィ・マクダエル
ランディ・オルランド
キーア

□ダドリーの自宅（朝）

タイトルコール

ダドリー　「ダドリー捜査官の優雅な朝」

朝、身支度を整えているダドリー。

ダドリーM「俺の名はアレックス・ダドリー。クロスベル警察捜査一課の捜査官だ」

【SE】ブラシで髪を梳かす音（しゃっ、しゃっ）

ダドリーM「ただいま出勤時間の三十分前。十分前に本部へと辿りつき、朝礼の準備をするのが日課だ」

【SE】ブラシで髪を梳かす音

ダドリーM「……だが、雨上がりの清々しい朝を迎えた今日、そんな俺のスケジュールを乱す難題がふりかかってきた」

鏡を見て、愕然とするダドリー。

ダドリー　「寝癖が……直らん。髪が乱れた状態で外に出ることなど、断じて許されん！　ここはヘアスプレーだ！」

【SE】スプレーをかける音

【SE】寝癖が跳ねる音（ピンっと弦を弾くような音）

ダドリー　「くっ、ダメか。ならばワックスでどうだ！
ぬおおおおお！」

【SE】髪を懸命に直してる音（わしゃわしゃ）

※時間経過

【SE】鳩時計の音（パポッ）

□ダドリーの家の前（朝）

寝癖が直り、本部へと向かうダドリー。

【SE】扉が閉まる音

ダドリー　「ふぅ……寝癖め、俺に五分もタイムロスさせるとは」

ダドリーM「予定が狂ってしまったな。走れば間に合うか。だが……待てよ。この俺がそんな慌てた姿を地域住民に見せられるだろうか。いや、ダメだ。ここは競歩だ」

【SE】早歩きの足音

ダドリーM「冷静に……冷静に。誰にも急いでるなんて悟られるな」

急いでいたダドリーの前を、車が横切る。

【SE】水たまりの上を、タイヤが通る音（バシャ）

ダドリー　「うおっ！」

【SE】車が通りすぎる音

ダドリー　「ったく、車の運転がなってないな。街中はもっと慎重に運転しろ！　俺は時速八キロで走行するぞ！　今のように水たまりの水を跳ねさせたことなど一度……！」

と、自分の足元を見るダドリー。

ダドリー　「ん!?　なああ！」

ダドリーM「お、俺の特注の靴に！　マイフェイバリットシューズに！　水たまりの泥水が～！」

【SE】靴を磨く音（きゅっきゅっ）

ダドリーM「くそっ、このっ！　新品と思うほどの輝きまで磨いてくれるっ！」

ダドリー「（我に返って）はっ」

ダドリーM「い、いかんいかん。靴が汚れたことは、俺の人生ベスト5に入るほどの大惨事だが、乱心するとは修行が足りん。誰にも見られなかっただろうな？　何事もなかったようにここを去ろう」

ダドリー「（冷静に）一分のタイムロスだ……急ぐか」

【SE】早歩きの足音（どんどん遠ざかっていく）

去っていくダドリーを、通りがかったエリィとランディが見る。

エリィ「（呆然）……ねえ、ランディ」

ランディ「なんだ、エリィ」

エリィ「今、ダドリーさんが神業みたいな靴磨きを披露した後、競歩で去っていったんだけど……」

ランディ「ああ……あんなに急いで、遅刻でもしそうなのか？」

※時間経過

【SE】鳩時計の音（パポッ）

□行政区（朝）

ダドリー「ん？」

目の前に猫が立ちふさがり、足を止めるダドリー。

【SE】猫の鳴き声

ダドリー「おい猫、目の前に立たれると通れないだろう。どけ」

【SE】猫の鳴き声

ダドリー「どかない気か。ならば仕方がない、俺が避けて通ろう。（避ける掛け声）ほっ」

猫の右を通ろうとしたら、猫がダドリーの目の前に移動する。

【SE】猫の鳴き声

ダドリー「ん？（避ける掛け声）このっ」

今度は左に避けようとしたら、猫も同じように移動する。

【SE】猫の鳴き声

ダドリー「な！　俺が右に避けたら右に……左に避けたら左に移動するとは！　俺の行く手を阻む気か！　お前など、飛び越えてくれる！　はぁ！」

【SE】跳躍の音

【SE】着地の音

ダドリー「ふぅ、三十秒のタイムロスだ。急ごう」

【SE】早歩きの足音（以降ずっと流れている）

【SE】猫の鳴き声

猫がダドリーの競歩について走ってくる。

ダドリー「なっ、なんだとっ！　なぜ追いかけてくる！」

【SE】猫の鳴き声

ダドリー「くっ、本部に猫を連れて出勤するなど、俺のイメージに反する！　撒かなければっ！　この際、走ることもやむを得ん！　うおおお！」

【SE】走る音（以降ずっと走っている）

【SE】猫の鳴き声

ダドリー「このっ、しつこいなっ！」

そこへ、キーアが通りかかる。

キーア「あ〜！」

ダドリーM「ん？」

キーア「コッペが、ぶすっとしたおじさんと追いかけっこしてる～！　キーアも入れて～！」

ダドリー「んなぁ！　追いかけっこしているわけではない～！　というか、誰がぶすっとしたおじさんだあああ！」

※時間経過

【SE】鳩時計の音（パポッ）

□クロスベル警察本部（朝）

やっと本部に辿り着くダドリー。

ダドリー「はぁはぁ……なんとか本部に辿りつけた。なんなんだ、今日は。まあいい、出勤時間には間に合ったはず……」

時計を確認して、驚愕するダドリー。

ダドリー「……い!?」

遅刻していることに気付き、ダドリー絶叫。（最後のほうエコーお願いいたします）

ダドリー「な、ななな……！　い、一分遅刻だと～～!!」

× × ×

警察本部に来たロイドが遠くでダドリーがのたうちまわっているのを見ている。

【SE】床に拳を打ちつけている音（ガンッガンッ）

ダドリー（off）「ぬおおおおお」

ロイド「（戸惑い）……どうしよう」

ダドリー（off）「（絶叫）俺の、無遅刻無欠席の記録があああ！」

ロイド「ダドリーさんに用があって本部に来たけど……」

ダドリー（off）「くそっ！　あれしきのことで俺の功績が穢されるとは！　俺は、あの気持ちい～ベッドから、毎日時間通りに起き上がれるように、血のにじむような努力をしてきたんだぞ！　物心つく前から！　今日の屈辱は生涯忘れん！　絶対にだああああ！」

ロイド「ダメだ……声がかけられない。一体どんな悲惨な目にあったんだ？」

了

■零の軌跡
本編ドラマCD オマケトラック

ツァイトの話「ティオのベストパートナー」

【登場人物】
ツァイト
ティオ・プラトー
ロイド・バニングス
エリィ・マクダエル
ランディ・オルランド
キーア

□特務支援課（朝）

ツァイト、タイトルコールの後に吠える。

ツァイト「ティオのベストパートナー。ウォンっ」

特務支援課で、キーアと遊んでいるツァイトのところに、仕事から帰ってくるメンバー。

【SE】扉が開く音

ロイド「ただいま、キーア」
キーア「あ、ロイド、みんな、おかえりなさーい」
エリィ「ひとりで留守番してて、さみしくなかった？」
キーア「うん。ツァイトと一緒だったから平気だよ、エリィ」
ツァイト「ウォン！」
ティオ「キーアが退屈しないように、一緒に遊んでくれたんですね。ありがとうございます、ツァイト。（撫でながら）なでなで」
ツァイト「（嬉しそう）ウォウォン」
ロイド「（感心）やっぱりツァイトは、ティオに一番心を許してるな」

そこへ、コッペがやってくる。

【SE】猫の鳴き声

ツァイト「（警戒）……⁉」
ティオ「あ、コッペ」

【SE】猫の鳴き声

ティオ「お腹が空いてるんですか？　今、ご飯をあげますね」
ツァイト「（驚き）ウォン⁉」

ティオがキッチンへと去る。

【SE】去っていく足音

【SE】猫の鳴き声

ツァイト「（コッペに威嚇）ウウウ……」

ツァイトとコッペがじっと見つめ合っており、それに気づくロイド。

ロイド「ん？」
ランディ「どうした？　ロイド」
ロイド「なぁ、ランディ。なんか……ティオがいなくなった途端に、ツァイトの様子がおかしくなった気がしないか？」

【SE】猫の鳴き声

ツァイト「（静かな唸り）ウー」
ロイド「（怖がって）ほら、ツァイトとコッペがにらみ合ってるよ」
ランディ「仲が悪いのか？」
キーア「うーん。なんとなくだけど……ツァイトはコッペにティオを取られちゃうと思ってるみたい？」
ランディ「そうか！　つまり、こういうことだな！」

ランディのアテレコ開始。（エコーお願いいたします）

ランディ「（コッペ役）ティオたんが一番好きなのは、このボクなのニャ」
ツァイト「ふん、いつも餌を欲しがってるだけのお前よりも、戦闘で役に立ってる俺が一番に決まっている」
ランディ「（コッペ役）ボクなんてこの間、ティオたんに膝枕してもらったニャ～」
ツァイト「こ、このタダ飯食らいが……！　なんと羨

　　　ま――（言い直し）なんと図々しいことを……!」

アテレコ終了。

エリィ　「（真剣）なるほど。ふたりはライバルなのね」

ロイド　「（つっこみ）いやいや、ランディが勝手にアテレコしてただけだから。というか、今ツァイトのアテレコしたの誰だ？」

ロイドの疑問を無視して、考えこむランディとエリィ。

ランディ　「罪な女だな～ティオすけ。けど、ツァイトとコッペだったら、ティオすけはどっちが一番なんだろうな？」

エリィ　「（真剣）やっぱり、仕事でもパートナーになってくれるし、ツァイトじゃないかしら」

ランディ　「でも、犬派か猫派って考えると、みっしぃ好きなんだから、猫派じゃねえか？」

ロイド　「その前に、ツァイトは犬じゃなくて、狼だと思うんだけど……」

エリィ　「ちょうど戻ってきたから、聞いてみましょうよ」

【SE】近寄ってくる足音

ティオ　「どうしました？」

ランディ　「ティオすけ、ちょっと聞きたいんだが、お前は犬派なのか？　猫派なのか？」

ティオ　「なぜそんなことを聞くのかわかりませんが……」

ツァイト　「（気になる）……」

ティオ　「（きっぱり）みっしぃ派です」

ツァイト　「（衝撃）……ウォン!?」

ランディ　「（戸惑い）いや、オレたちは犬派なのか猫派なのかをだな」

ティオ　「（きっぱり）みっしぃ派です」

ツァイト　「（悲しい）く、く～ん」

ティオ　「……？　どうしました、ツァイト？」

その場で逆立ちをし始めるツァイト。

ツァイト　「ワォン！」

ティオ　「え？」

ランディ　「な……！　ツァイトが！　ツァイトが立った！」

ロイド　「いやランディ、これ、逆立ちだと思うんだけど……」

エリィ　「まっすぐに伸ばされてブレない四肢……！まさに肉体が作り出した芸術品だわ！」

ロイド　「ええ？　そこまで言っちゃう？」

ティオ　「いきなりどうしたんですか？　ツァイト」

ツァイト　「（じっと耐えて）ウウ……ウォウ……」

ランディ　「ティオすけ、よく見てやれ！　今ヤツは、みっしぃに負けまいと必死に自己アピールをしているところなんだ！　自分こそがお前の一番だとな！」

バランスを崩すツァイト。

ツァイト　「ワォン!?」

ティオ　「あ……！」

ツァイト　「ワォーンっ！」

【SE】周囲の物にぶつかって倒れる音（どんがらがっしゃん）

キーア　「わー！　ツァイトー!!」

ランディ　「あー派手に転んだな。やはり犬に二足歩行は無理だったか」

ロイド　「だからツァイトは狼だって。それよりも俺、ツァイトが今、倒れる時にそこにあったぬいぐるみを巻き込んだことのほうが気になるんだけど……」

ぬいぐるみを下敷きにしていることに気付き、驚くツァイト。

ツァイト　「ワォン!?」

ティオ　「あ……私のみっしぃぬいぐるみ」

ツァイト　「（動揺）ワォワォワォ……っ」

ランディ　「まずいぞ……！　アピールするどころか、怒りを買ったんじゃないか!?」

平謝りするツァイト。

ツァイト　「ワォオオン、ワォオオン……！」

ティオ　「……そんなに謝らなくていいですよ、ツァイト」

ツァイト「(意外) ウォンっ？」

ティオ「理由はよくわかりませんが、私のために頑張ってくれたのを、怒るはずもありません。あなたは大切なお友達ですからね」

ツァイト「(感動) ウォン……」

ティオ「それに、ぬいぐるみですから、下敷きにしたくらいじゃ壊れませんし……」

が、ぬいぐるみの腕が千切れている。

ティオ「あ……」

ツァイト「ワォン⁉」

ティオ「(震えて) 腕が……みっしぃの腕が……取れてる」

ツァイト「(怯えて) ワォ……ワォ……」

ティオ「これ……限定品だったのに」

ツァイトを睨むティオ。

ティオ「ツァイト……やっぱりオシオキです」

ツァイト「(悲痛の叫び) ワ……ワォオオオン！」

了

■零の軌跡 本編ドラマCD オマケトラック

ワジの話「アフターファイブは有効に(仮)」

【登場人物】

ワジ・ヘミスフィア
ロイド・バニングス
エリィ・マクダエル
ティオ・プラトー
キーア

□中央広場(夕)

タイトルコール

ワジ「アフターファイブは有効に」

黄昏ながら、ロイド達の前に現れるワジ。

ワジ「はぁ……沈む夕陽に照らされたクロスベルの街……まるで僕の心を表しているようだね」

ロイド「(戸惑い) なんだかいきなり詩人っぽいけど、大丈夫か？ ワジ」

ワジ「やあ、奇遇だね、ロイド」

ロイド「いや、明らかにそっちから近寄ってきたような気がするんだけど……」

ワジ「ああ、細かいことは気にしない。運命というものは自分で切り開くものなのさ」

ロイド「なんだか台詞自体はいい感じに聞こえるけど、今使う意味ないよな？」

ワジ「(少し考える) ……」

ロイド「……？」

ワジ「ところでロイド、今帰りかい？」

ロイド「急に話題を変えた⁉」

ワジ「それとも仲間とはぐれて迷子なのかな？ 巣から落ちてひとり寂しく震える小鳥ちゃん。僕が慰めてあげようか」

ロイド「いや、ただ仕事帰りに買い物があったから、みんなには先に帰ってもらっただけで……というか、さっきからおかしなことばっかり言ってるぞ⁉」

ワジ「すまないね、今日は少し調子がよくないんだ」

ロイド「え？　具合でも悪いのか？」

ちょっと深刻になるワジ。

ワジ「そうじゃないんだ。悩みがあってね……」

ロイド「どんな？」

ワジ「君に話していいものか……」

ロイド「俺で力になれるなら、相談に乗るけど」

ワジ「君は優しいね。常闇に生きる僕には、その光は眩しすぎるよ……」

ロイド「そういう表現はもういいから」

ワジ「ふふ。とにかくこの場所で話すのもなんだから、歓楽街にでも行こうか」

※時間経過

□歓楽街（夕）

【SE】人の賑わい

歓楽街のベンチに座っているふたり。

ワジ「やっぱり夕暮れ時の歓楽街は人が多いね」

ロイド「……なあ」

ワジ「なんだい？」

ロイド「何が悲しくて、男ふたりでベンチに座ってアイス食べなくちゃならないんだ？」

ワジ「一度食べてみたかったんだよね」

ロイド「それはいいとして……悩みっていうのは、こんな人通り多いところで話すことなのか？」

ワジ「（少し考える）……」

ロイド「……？」

ワジ「隙あり！」

ロイドの口にアイスをつっこむワジ。

ロイド「むぐっ！」

ワジ「はい、あ〜ん」

ロイド「（口に含みながら）もうしてるから！（飲み込み）っていうかこれ、ただ口につっこんだだけだから！」

ワジ「さあ、次はカジノに付き合ってもらおうかっ」

ロイド「突然だな、おい！」

□カジノ（夕）

【SE】スロットの音

スロットをあと一歩のところで揃わなかったロイド。

【SE】スロットが外れる音（残念な、ブブーのような音）

ロイド「あ、あ〜！　また負けた！」

ワジ「（俳句っぽく）捜査官　意外と弱い　カジノかな」

ロイド「なぜ俳句!?」

ワジ「さあ、次はトリニティに行こうか」

ロイド「え！　おい！　ひっぱるな！」

ワジ「さあ、夜はこれからだよ！」

ロイド「ちょっと待て！　悩みはどうした〜!?」

□特務支援課（朝）

【SE】ちゅんちゅんという小鳥の鳴き声

ロイド「う、う〜ん……」

起き上がるロイド。

ロイド「あれ？　支援課のソファ？　いつの間に戻ってきたんだっけ……確か最後はトリニティでカクテル飲んで……それから……」

ロイドを覗きこんでいる支援課メンバー。

ロイド「って、うわ！」

エリィ・ティオ・キーア「じー」

ロイド「お、おはよう、みんな。えっと、エリィ、俺、どうやって帰ってきたんだ？」

エリィ「（言いづらい）……えっと」

ロイド「エリィ？」

エリィ「（おそるおそる）ねぇ、ロイド。朝までワジくんと何してたの？」

ロイド「え？　あ、朝まで？　俺、朝帰ってきたのか？」

ティオ「帰ってきたといいますか、今朝がた、玄関の前で倒れているのを、キーアが発見してくれました」

ロイド「ああ、そうなんだ……。なあ、ティオ。どうしてそんなジト目で俺のこと見てるんだ？」

ティオ「キーア、あれを」

キーア「はーい」

ロイドに手紙を差し出すキーア。

キーア「これ、ロイドが寝てた近くに落ちてたの～」

ロイド「え？　手紙？」

【SE】手紙を開く音

手紙を読むロイド。

ロイド「えーっと、なになに？」

ワジ『昨日のデート楽しかったよ、またしようね。
　ワジより』

ロイド「え……えええええええ!?」

エリィ「昨日、買い物があるなんて言って、ワジくんとデートに行ってたのね」

ロイド「ちょっと待ってくれ！　ワジとは偶然会っただけで！」

ティオ「歓楽街で、アイスの食べさせあいっこしてたそうですね……いつの間にそんな仲に」

キーア「（意味はわかってない）夜の旧市街に消えていったって、ホント～？」

ロイド「い、いやいやいやいやいや！　相手は男だから！」

エリィ「……大丈夫よ、ロイド」

ロイド「へ？」

エリィ「たとえ男が好きでも……貴方は私達のリーダーだからっ」

ロイド「そんな達観したようなこと言われても！」

ティオ「お幸せに、ロイドさん」

キーア「よくわかんないけど。よかったね、ロイド～」

ロイド「ちょ……誤解だあああぁ！」

×　×　×

【SE】グラスの氷が揺れる音

ワジ「ああ、楽しかった。まったく……なんだかんだ言いながら全部付き合ってくれちゃうなんて、やっぱり面白いな。ふふ、たまのロイド補給は必要だよね」

了

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

今月のプレゼントはこちら!!







① 2名様

❶『みんな集まれ！ファルコム学園』キャスト寄せ書きサイン色紙

絶賛放送中のアニメ『ファルコム学園』の豪華キャストが勢ぞろいしたサイン色紙をマガジン読者だけに！

② 1名様

❷『英雄伝説 零の軌跡』クリアファイル

エナミカツミ先生のメインビジュアルを使用したクリアファイル。裏面にはキュートなちびキャラが大集合！

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

宛先：
件名：vol.36プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白い→
　つまらない→
　（記事一覧から1つずつ）
3：①
　②
　（はい・いいえ／作品名）
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

【記事一覧】

1：アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』情報
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：『ファルコム学園』収録レポートコミック
4：『3rdフリータイム！』
5：英雄伝説 零の軌跡 ショートストーリーズ
6：jdkバンドドラマー・オカジの人生半キャラずらし
7：ティオのファルコムラジオ
　めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
8：jdkバンドボーカル・コテカナのコテ放題♥
9：FalcomFanArtCollection
10：ファルコムニュース
11：『英雄伝説 零の軌跡』ドラマCDシナリオ

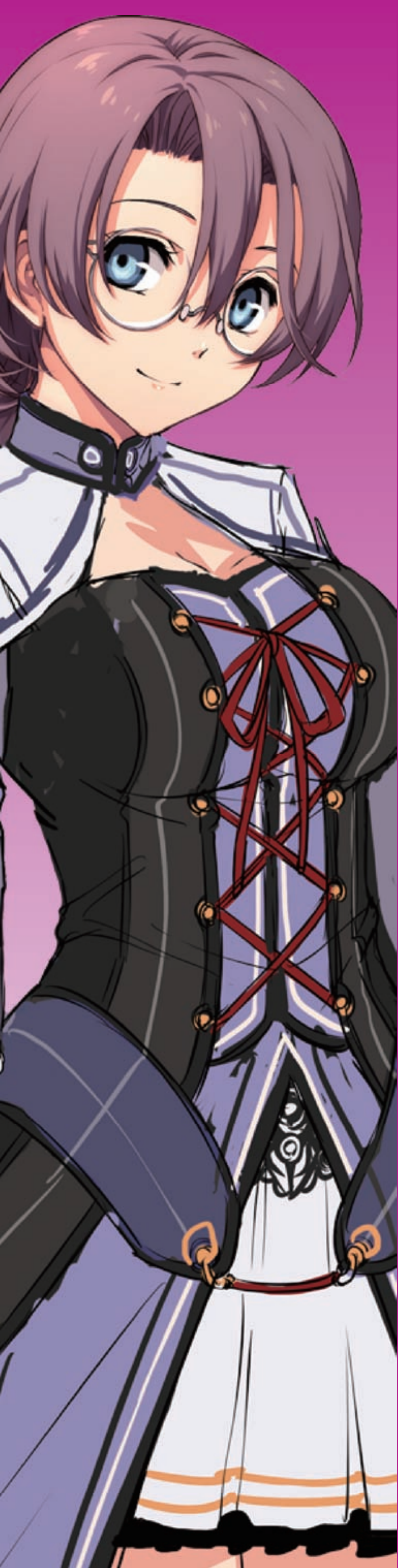
アンケート

①ファルコムのゲーム音楽の楽譜集が発売されたら購入を検討しますか？
②日本ファルコムのゲーム作品で1番好きな作品は何ですか？

特設サイトからも応募ができます!
http://www.field-y.co.jp/root/index.php/falmagap

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り　2月24日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.36

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

Copyright
©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved.
©2014 Chara-ani
©2014 FIELD-Y
©DAISUKE ARAKUBO 2014
©Shinki Kitsutsuki 2014
©DAISUKE TAZAWA 2014

日本ファルコム(株)のライセンス許諾商品です。